蒼いときの流れる頃

夢追い人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
蒼いときの流れる頃

【Ｎコード】
Ｎ５５８１Ｚ

【作者名】
夢追い人

【あらすじ】
大学のバレーボール選手を恋人に持つ裕美は、彼氏の先輩である本宮純樹に興味を抱く。だが、純樹は裕美の思うようには心を動かさない。やがて、純樹が過去の恋人に手紙を書き続けていることを知る。裕福な家庭に生まれて我がままに育ってきた奔放な裕美は、女を武器にして純樹を愛し、傷つけ、虜にするが、純樹の本当の愛はどこにあるのか……。

躍動のとき（前書き）

勝気で負けず嫌いの裕美が、恋人の先輩である純樹と出会う。だが純樹は冷たい。初めて男に軽くあしらわれた裕美は、自分にべったりの彼氏よりも、ちょっと風変わりな純樹に接近してゆく。熱いエネルギーが燃え上がり心身ともに大きく躍動するとき……。

躍動のとき

涼しげな風に髪をなびかせながら、眩しそうに片目を閉じて、夕陽を見上げてぽつりぽつりと歩いていた裕美(ゆうみ)は、ひらりと身を翻してもう一度達彦(たつひこ)を振り返ったが、彼が楠木にもたれ掛かったまま、地面を見つめて煙草を吹かしている様が目に入ると、微かに薄い笑みを浮べただけで、すぐにまた、紅色に染まりつつある日没の夕陽に向かって歩み始めた。

裕美は腹立たしい気持ちを紛らわせるために、さも快さそうに、夏には貴重な涼風で心を洗った。

彼女は、達彦と明日の約束をしたのだが、どうにも気が進まない。何もかも、彼の言いなりになるのが嫌だった。それとも、この暑さで単に苛立っているだけなのか、裕美は、今の不機嫌の理由を自分でも把握しかねていた。

明日は、達彦が所属するS大学バレーボール部の試合がある。達彦は三回生でチームのエース格。高校時代も全国大会に出場の経験があった。身長は百八十五センチあるが細身で色白だった。どちらかと言うと美少年風で、スポーツ選手と言うよりはモデルにいるようなタイプであった。当然の如く、女性にも良くもてた。入学式の時、裕美の隣に座ったのがきっかけで知り合い、つき合い始めてから約二年になる。

裕美は、試合の応援にゆくことには何ら抵抗はない。しかし、弁当を作ってこいと言われて抵抗した。相手が誰であろうと、命令されるのは許されない性分だ。実際のところ、達彦に言われるまでもなく、昼食の準備くらいはしていく積りであった。ところが、単に命令口調で言われたことが癇(かん)に障ってしまった。

『気が向いたら作ってあげるわ』

と、枯れ果てた落葉のような、無味乾燥な口調で言葉を落としてから、さっさと歩いてきてしまった。

一度だけ振り返ってみたが、達彦は怒っているのか拗ねているのか、暗い表情でぼんやりと煙草を燻らせていた。裕美の後ろ姿を、動揺した表情でも浮べて見送っていれば、彼女の気持ちも持ち直していたのかも知れない。

裕美が一番嫌いな達彦の一面、頑固で我侭な彼の一面を目の当たりにして、どうにも気持ちを切替えることが出来なかった。こんなつまらないことで喧嘩になってしまう二人の仲は、もう終わりにするべきかも知れないと、彼女の心のどこかで、自然にそんなシュミレーションが行なわれたりしていた。

裕美は、感傷的な夕陽を浴びながら、すべてを捨て去るような大きな深呼吸をした。

翌日、出掛けることも億劫だったが、また喧嘩になるのも面倒なので仕方なく部屋を出た。結局、昨夜は達彦から電話もメールもこなかった。たった一言謝れば良いのに。いや、謝らなくても何らかの行動を起こしてくれれば、仲直りのきっかけができたのに……。

裕美は不機嫌な朝を迎えて、気が進まずにだらだらと準備をしていると、到底待ち合わせに間に合わない時間となってしまった。だが、彼女はメールの一通も送らずに、予定よりも一時間遅れで、ひとり電車に乗った。

試合会場は大坂市内の体育館なので、河原町から阪急電車に乗り込んだ。日曜日であるため、家族連れやカップルの姿が目立った。幸福そうに戯れている恋人たちを見ると、裕美は大きな溜息を吐いた。なぜだか、自分の生活や達彦との関係など、すべてが虚無なものに感じられてしまう。

発車の合図がホームに鳴り響いて、執拗なくらいのアナウンスが繰り返され、ようやく電車のドアが閉まろうとした時、階段から転がり落ちるように駆け下りてきた一人の青年が、間一髪で車両に飛び込んできた。

こんな人がいるから事故が起きるのだと思いながら、何となくそ

の青年の姿を目で追ってみた。その青年は赤いナップサックを背中に担いで、はあはあと息を撒き散らしながら裕美の方へ向かってくる。席を探している様子だ。彼女の横は空いている。裕美はなぜか、達彦とはかなり無理をして交際しているのではないのかと、その青年の行き着く先を推測しながら考えてみた。ふと、彼と視線が合った。反射的に目を伏せてしまう。

「すみません。ここ、良いですか？」

どきんとして再び彼の目を見上げると、随分涼しい瞳の青年であった。しかも随分背が高い。達彦と同じくらいかも知れない。細身なところも良く似ていた。

「ええ、どうぞ」

そっけなく返答して、少し窓際に身体を寄せた裕美は、視線を外に向けた。そして、電車が地下を走っているために窓に映った青年のシルエットを、見るともなく見ていた。

年恰好が達彦と似ているために、何となく親近感を覚えた裕美は、この青年は大学生なのだろうかとか、達彦の方が顔は整っているなどと、勝手な観察を楽しんでみた。

そんな想像をしているうちに、彼が何か話し掛けてこないかと言った期待感と、時折触れる腕の硬い筋肉の感触で、裕美の血流リズムが不規則に狂ってしまった。

大宮駅を過ぎて電車が地下を抜出ると、ぱっと明るい風景画が車窓いっぱいに広がった。隣の青年がごそごそ動いたかと思うと、雑誌を広げて熱心に読み始めた。だが、五分と経たぬうちに眠り始めている。折節、裕美の方へ頭を持たれ掛けたりするが、すぐに気づいて、

『ごめん』

と一言呟くや、すぐにまた心地良さそうな眠りに落ちていった。どこにも疲れた様子はなく、はつらつとした躍動感がみなぎり、子供のように純朴な寝顔であった。

やがて電車は梅田駅に到着した。と、今しがたまで眠りこけてい

た青年がさっと立上り、裕美に軽く会釈してから赤いナップサックを抱えて、心持ち頭をかがめながら鉄砲弾のようにホームへ飛び出して行った。裕美は、涼しい風がスカートの中を吹き抜けていったような印象を覚えて、何とはなしに、柔らかくて優しい心持ちに浸されていた。

裕美はタクシーに乗って体育館に到着した。正面玄関から入って二階席に上がると、久美子と加奈が一番前列に陣取ってフロアを見下ろしていた。

「ごめんね、遅れちゃって」

「寝坊？メールくらい入れなさいよ」

三人の中でも世話やきタイプの久美子が裕美を軽く叱る。

「はーい」

そう言って裕美は二人の横に腰掛けた。会場は五割位埋まっている。と言っても、ほとんどが各大学チームの関係者である。

「もう、始まっているの？」

裕美が二人に尋ねる。

「まだ、公式練習が終わったところよ」

一階のフロアでは両チームが円陣を組んで緊張感がみなぎっている。円陣の中で一体何を話しているのか、裕美は一度聞いてみたいような気になった。彼女は自然と達彦を探した。額に汗をかいて結構良い顔をしている。

と、その時、入口から人目を避けるような仕草でこそこそと、そのくせコートの真中を、首をくすめながら走ってきた選手がいる。達彦たちと同じユニフォームを着ているので、S大の選手であろう。その選手は片手を上げて、何やらみんなに呟きながら頭をペコペコさせて円陣に加わっていった。その様子を見ていた裕美は、天の悪戯のようなこの偶然にしばらく放心した。

「あの人……」

ついさっき、電車で彼女の横に座ったあの涼しい青年であった。

「純樹(じゅんき)さんがどうかした？」
久美子も加奈も、裕美と同じく、チームのメンバーと交際しているので、二人は他のメンバーたちともつき合いが多く、チーム事情にも詳しかった。裕美は、汗臭い体育系のクラブ活動が昔から好きではなかった。特に男子の下品な会話や粗雑な行動が嫌いで、達彦とつき合い始めてからも、バレー部のメンバーとは一線を引いていた。
「純樹さん？」
彼の名前を口にした瞬間、裕美の心に彼に対する興味が膨らんだ。
「ええ、本宮純樹(もとみやじゅんき)。四回生でエース。身長百八十三センチ。体重七十八キロ。高校時代はインターハイベストエイトのエースアタッカー。好きな女子のタイプはショートスカートとショートカットが似合う元気なタイプ。でも現在彼女なし」
久美子が事情通を披露した。
「いつからマネージャになったの？」
「知らない裕美の方がおかしいわよ。だって、達彦さんと同じ高校よ。達彦さんの一年先輩。インターハイも一緒に戦ったのよ」
裕美は、涼しい青年が自分の身近な存在であったことに驚いた。
「さっきね、電車で隣の席に座っていたの」
「何か話した？」
加奈が興味深げに参加してきた。
「何も……。私、全然知らない人だし、第一、ずっと寝ていたから、あの人……」
「結構、良いでしょう？とてもクールだけど優しい人よ」
久美子が意味深な瞳で裕美を覗きながら大きな声ではしゃいだ。
「良くわからないけど、爽やかな人ね」
裕美は、隣の席で感じた彼の雰囲気を思い出しながら答えた。
　ところが、ゲームが始まると、優しいとか爽やかとか言う印象は崩れ去った。大声で指示をしながら必死で白いボールを追っている。顔色は紅潮し、目は釣り上って狂気的な表情でコートを飛び跳ねている。しきりにトスを求め、見ていて心地よいジャンプ力と滞空時

間で強烈なスパイクを床に突き刺す。敵のスパイクをブロックし、或いは、床を汗で浸してレシーブする。純樹だけではない。ポイントを決めた時には全員が喜び、決められた時には全員が床を叩いて悔しがった。

三人の女達は次第に口を利くのも忘れ、男達のプレーに魅せられていった。裕美も、初めて見る男たちの真剣な戦いに、衝撃に近い感動を覚えた。今まで、粗暴という印象だけで、何となく忌避してきた男の集団が、その荒々しい本能を剥きだして全力で戦う姿は、雄雄しく、素朴で、自然で、汗まみれの姿が美しくさえあった。そしてその剥きだしの本能に震える女の感性が自分にも潜在していた。

完全に試合に？み込まれてしまった三人の女達は、純樹や達彦がスパイクを決めると一緒になって飛上がって喜んだ。彼らの一つ一つのプレーに喜び、悔しがった。そして大声を出して声援を送る。裕美も、声援を送る歓びを初めて味わった。

接戦の末、何とか勝利することが出来た。リーグ戦も半ばとなり達彦達は上位を狙える位置にいた。今日は二試合を戦う予定だった。

選手達が二階に上がってきた。各チームがロッカールーム代わりに観客席を使っている。

達彦がすぐに裕美を見つけたが、彼女の視線が達彦には向けられずに、純樹の方へ向けられていることに気づいて、彼は不思議そうな表情を浮かべた。純樹も、ふと裕美に気づいて驚いた表情を浮かべた。

「あれ、あなたはさっきの？」

純樹がそこまで言うと、

「ええ」

と、小さく呟いてから、にこりと最高の笑顔を浮べて見せた。

「どうしていたんだ？みんな心配したんだぞ」

と、達彦が不機嫌そうな口調で割り込んできた。

「何だ、お前の彼女か？さっき、偶然電車で乗り合わせたんだ」

純樹はにやりと笑って達彦の肩を叩いてから、見覚えのある赤いナ

ップサックの中を引っ掻き回し始めた。
「昼飯にするぞ」
純樹は全員に指示してから、バッグから取り出したTシャツに着替え始めた。裕美は、チラリと純樹の筋肉質な裸を後ろから盗み見た。その瞬間、奇跡的な偶然の期待感に茫然としてしまったが、じっくり観察することも出来ず、冷静に考えるとそんな奇跡など起こり得る筈が無いと、今朝からの出来事で少々舞上がってしまっている自分を笑うことで平静を取り戻そうとした。
「飯は？」
達彦の不機嫌な声が、裕美をいつもの不快な井戸に突き落とした。
「ごめんね、朝寝坊しちゃったの」
彼女は、先ほどまでの達彦の勇姿に免じて、ここは可愛く取り繕った。
「なんだ、弁当作っていて遅れたのかと思った」
と、達彦の低次元な皮肉を言ったが、
「バカ、自分のことは自分でしろ！」
と、純樹が軽く叱った。が、周囲のほとんどが、彼女に昼飯を用意してもらい、外の芝生や、休憩ホールへ仲良く出て行く現実を見て、彼は苦笑いを浮べた。
「もてるのね？バレー選手は」
誰に言うともなく呟いた裕美の言葉に、
「例外もいますけどね」
と、純樹が答えた。
「先輩、外へ食べに行きましょうか？」
「ああ、彼女も一緒に行きましょう」
裕美は、一度達彦の顔色を伺ってから、純樹の誘いに小さく頷いた。達彦は全く無頓着な表情でシャツを着替えている。
　三人は体育館を出て、しばらく歩いてからファミリーレストランに入った。冷房が良く効いている。大きな純樹と達彦が向かい合って座った。達彦は、隣に裕美が座るのを当然だと思っているから、

意地悪して純樹の横に座りたくなったが、純樹が二人掛けシートの真中に座っているので、仕方なく達彦の望みに従った。
「何にする？」
達彦が裕美にメニューを差し出した。
「どうしよっかな」
彼女はさし当たって食べたい物が浮かばない。と、言うよりも食べたい物が無かった。朝が遅かったのであまりお腹は空いていない。
「僕はサンドウイッチとミートパスタをお願いします」
純樹が女性店員に優しい口調で頼んでいる。
「じゃ、私もサンドとコーヒを」
「俺はかつカレー」
二人でいる時よりも楽しそうな裕美の声に、達彦は、眉間に浅いしわを寄せた、不機嫌そうな表情を浮べている。裕美はそんな彼に構いもせずに、純樹に対する好奇心を満足させようとした。
「強いですね」
「まだまだ力を出し切れていませんよ。この状態じゃ優勝は無理です」
ほんの社交辞令で言った言葉を、冷めた口調で言い捨てられてしまった。バレーのことは素人なのだから、それなりの返事の仕方があるだろうに。気の強い裕美はむっとして、純樹から何か言われるまでは、自分から話し出すのはよそうと思った。すると、あろうことか、純樹も達彦も、何も話さずに黙っている。裕美はその存在さえ忘れられているようであった。
　こんなことは今まで一度も経験したことがない。最初に出会った男は皆、社交辞令もあろうが、彼女に興味を示し、あれこれと話題を振りまいて気を惹こうと努めてくれた。
　然るに、この本宮純樹という男は、裕美の気を惹くどころか自己紹介すらしないし、裕美の名すら聞こうとしない。裕美はそれなりに注目を浴びる程度の美貌だと思っているし、スタイルにも自信があった。裕美はかなり自尊心を傷つけられて憤りさえ感じ始めて

いた。
　それぞれのオーダーした物が出てくると、純樹は猛烈な速さで食べ始める。パスタをズルズルと音をたてて吸っている。裕美は白けた視線で彼を睨みつけた。裕美にとっては絶対に許されない行為である。
「お腹空いているのね？餓死寸前？」
と、皮肉の言葉を交えて純樹に問を掛けた。
「ええ、朝から何も食べていないんですよ」
余りにも率直な言葉と、子供のように素直な口調に、裕美はそれ以上責める気にはなれなくて、微かに小さな溜息を漏らした。一方の達彦は、背筋を曲げたまま、さも不味そうにゆっくりと食べている。純樹はパスタを音をたてて吸いながら、サンドウイッチを口に詰め込み、コーヒーと水で流し込み、二度と一緒に食事などしたくないと思わせるのに十分な不愉快を裕美に与えながら、驚くほど迅速に食べ干した。
　食事の音もさることながら、裕美にとっては会話のない食事など、大嫌いな人間と二人きりでいる以上に辛い沈黙であった。
『無神経な男達』
裕美は鳥肌の立つ思いでコーヒーをすすりながら、先ほどの試合の感動は、やはり自分には似合わないような気がしてきた。
「ご馳走さま」
両手を合わせた純樹はさっと立上って、
「まだ時間はあるから、ごゆっくり……」
と、達彦に意味ありげな笑顔を向けてから風のように立ち去っていった。その刹那、裕美はどきんと衝撃を感じて、もしかしたら私たちに気を遣って、あんなに速く食べて出ていったのだろうか。裕美は純樹の思いやりと、そんな優しさに気がつかずに苛立っていた自分とを比較して、しばらく自己嫌悪に陥ったのも束の間、彼がそんな大人の行動をとったがために、自分が恥ずかしく感じさせられたこと自体が許されなくなってきた。何となく自分が子供扱いされた

ような口惜しさを覚えていた。
「本宮さんに惚れたのか？」
そんな複雑に乱れた気分の折に、とても耳障りで下らない言葉の羅列が届いてきた。
「可愛い作り笑顔を浮かべて、興味深々て感じだったぞ」
と、達彦が更につまらない言葉を続けた。
「作り笑顔だってわかったんでしょ？初対面だから愛想良くしただけじゃない。あなたの高校時代からの先輩でしょ？これでも少しは気を遣っているのよ」
と、口元に笑みを浮べて優しく諭した。
「そうか、ありがとう」
達彦の単純な反応を見た裕美は、心の奥底で冷笑した。

裕美は大教室に入って、どの席に座ろうかと周りを見渡しながらゆっくり前へ歩んでいった。この講義は他の友達は受けていない。前期試験が近いためか、大学にいる学生の頭数が、最近増えてきたように感じる。
後ろの入口から入って、前方の席へと進んで行った彼女の視界の片隅に、何か違和感のある光景が飛び込んできた。もう一度ゆっくりと見渡してみたが、何の特徴もない、、ただの教室の風景だ。気のせいかと思い直して、元の自分に戻りかけた脳裏に純樹の気配を感じ取った。だが、周囲をもう一度見渡しても彼はいない。ふっと、小さな溜息を吐いて、こんな所で純樹を思い起こす自分が不思議だなと感じた時、実際に純樹の姿を発見した。
ヘアスタイルが角刈りになっている。気づかないはずである。身体の大きさは若干目立つが、全くイメージが変わっている。
あの日、午後の試合にも勝っていた。だが、あの昼食以降、純樹は裕美に話し掛けてこなかった。彼女も何となく達彦の目が気になったり、そもそも純樹への期待や失望が入混じって複雑な気分であったから、彼に話し掛けることはなかった。ただ一言、昼食のお

礼を言っただけである。彼が二人の代金まで払ってくれていたのだ。
「こんにちは」
心持ち緊張気味な自分がいつもの自分でないようだ。
「ああ、君か。こんにちは。経営学部でしたか」
「何学部に見えます？」
「そうですねえ、やっぱり外国語学部かな。英語なんかペラペラ話しそうな気がします」
「ペラペラおしゃべりはしますけどね、日本語が楽しいわ」
笑顔で答えた裕美は純樹の隣に腰を降ろした。
「どうしてそんなに短く切ったの？」
「暑いでしょ。僕は無精者ですから、髪の手入れなんてやっていられないですよ」
言われてみると確かに、純樹はショートパンツに黄色いTシャツを着てサンダルを履いた、いかにも、ファッションなどどうでも良いといった感じであるが、決して不潔ではなかった。
「講義のノート、真面目に取ってますか？」
純樹が意味ありげな笑みを浮べて裕美の横顔を覗いた。
「当然でしょ」
裕美は即、純樹の意図を察した。
「助かります、何せ無精者だから。小まめにノートを取るなんて、とてもとても……」
「講義に出るのも面倒なんでしょうね」
「話しのわかる人ですね」
純樹の笑顔に、裕美は仄かな幸せを感じた。
　間もなく講義が始まった。学生の人数も多いため、ざわざわとした落ち着かない空気であった。裕美は熱心に耳を傾けていたが、隣の純樹がイライラしているのが机を通じて伝わってくる。
『なんて気の短い人なのかしら』
そう思った裕美は純樹の横顔を盗み見た。すると、彼は、机の上に顎を乗せてぐったりとだらけている。そうして、裕美を斜めに見上

げている。裕美は、彼の視線に一瞬虚を突かれたが、動揺を見抜かれぬよう前に視線を戻した。しかし、意識せずにいた積りが、彼の視線を受けていると思うと身体が硬くなり、耳たぶまで紅潮していくのを感じた。
「真面目なんですね？」
純樹の問いに初めて振り返って、
「臆病なだけよ」
と囁いた。
「臆病だと真面目に講義を聞くのですか？面白い人だ」
「決められたルールから外れるのが恐いのよ」
「へえ。僕はルールに乗っているのが恐いですよ。このままで良いのかってね。じゃあ、もう我慢できないので帰ります」
そう言って、机の上のペンやらノートを片付けて、教室を出て行くタイミングを計っている。
「メルアド書いておきましょうか？」
裕美がノートの端をちぎろうとした。
「いえ、達彦に聞きますから」
「じゃあ、純樹さんの番号は？」
本当はこっちの方を聞きたかったのではないかと、自分に疑問が浮かんでくる。
「達彦に聞いて下さい」
純樹は軽く笑って腰を浮かした。裕美は、冷たくあしらわれたことに気分を悪くして、
「私も出て行くわ」
と言って、教科書をパタンと閉じた。意外に大きな音がして、前列の女子学生が振り向いた。
「あなたまで出て行ったらテストの情報を得られないでしょう」
「あら、知らなかったの？先週、テスト範囲の発表があったのよ」
彼女はにんまりと笑って、自分のノートを軽く叩いて見せた。
「御一緒にどうぞ。ヒールなんて履いていないでしょうね」

純樹は苦笑いを浮かべながら彼女の足元を確認した。だが、生憎パンプスを履いている。
「裸足になるわ」
裕美はそう言ってパンプスを脱ぎ、教授が黒板に文字を書いている隙に二人して教室を脱出した。

「お茶でもいかが？」
実際のところ、純樹の方から誘ってくれるのを待っていたのだが、彼は一言も話さずにさっさと歩いて行くので、とうとう裕美の方から声を掛けた。
「折角ですけど、今日は失礼します。帰ってテスト勉強しないといけないので」
「へえ、講義にも出ない人が勉強をねえ。ところでどうやってテスト勉強をするつもり？」
裕美の言葉に純樹は肩をすくめて、
「参りました。じゃあ二十分だけ」
と、少々呆れ顔で返答した。
　純樹はブレンドコーヒーを、裕美はオレンジのフレッシュジュースをオーダーした。裕美は少し強引過ぎたかと少々反省したが、やはり純樹とゆっくり話してみたかった。色々と彼のことを知りたかった。
「怒っている？」
さっきから黙り込んでいる純樹に優しく尋ねる。
「怒る理由はないですよ」
「どうして何も話してくれないの？」
「共通の話題がありません」
裕美は軽い幻滅を感じながらも、
「もう、泳ぎに行った？」
と、明るく話題を提供してみた。
「まだですよ、泳ぎたいとは思うんですけどね、こう暑いと」

「連れていってくれる？」
裕美は、最も自信のある甘い笑顔を浮べて、純樹の瞳を斜めに覗き込んでみた。大抵の男は、この仕草をすると何らかの妥協をしてくれるのが常だった。
「あなたを？僕が？」
彼は人差し指で自分の鼻を指差しながら、ぽかんと裕美の目を覗いている。
「だめ？」
裕美は更に甘えた声色を使って寂しそうな表情を浮かべてみた。
「あなたには達彦がいるし、第一、僕は車を持っていない」
「変なことに気を遣うのね？」
彼女はふっと笑いを零しながら尋ねた。
「達彦に気を遣うと変ですか？」
「車のことよ」
「だって、女の子は赤い車が好きなんでしょ？」
存外真面目な顔をして言っている彼の言葉に噴出しそうになる。
「達彦さんのことなんて気にしなくても良いのよ。それから私は赤い車は嫌いなの。白の軽四に乗っているわ」
純樹は何か衝撃を受けた様子で、少し肩を竦めてからカップを静かに口に運んだ。
「私が誰とどこへ行っても達彦さんには関係ないし、彼が誰と何をしようと私も干渉したくないの」
「そうですか……。でも達彦はそんな風には思っていませんよ」
純樹は溜息に似た言葉を吐いた。
「私は拘束されたくないの」
厳しい彼女の口調に、軽く驚いた表情を表した純樹は、窓の外へ視線を外した。裕美は、達彦との関係について語るとなぜかむきになってしまう自分をいつも後悔している。純樹に、きつい性格の女と思われたかも知れないと不安が過ぎった彼女は、彼の視線を追ってみた。青葉に夏陽が照りつけて、白いコンクリートの肌にくっきり

と青葉の黒い影が浮いていた。
「でも、折角ですけど……」
と、青葉を見つめたままの純樹の言葉に、裕美のストローを回す手が止まった。
「他の誰かを誘って下さい。やっぱり僕は遠慮します。ややこしいことに巻き込まれたくもないですし」
純樹の冷たい言葉に胸を突かれたまま、裕美は氷から視線を外せないでいた。今までの男のような反応を示さない彼が、腹立たしくさえ感じ始めた。純樹はゆっくりと立上って、
「じゃあ、また。今日は時間が無いので失礼しますね」
と、優しい語気を漂わせたまま、しかし、氷から視線を外せないでいる裕美をそのままにして、夏の微風みたいに出て行った。
「ノート…」
はっとして裕美が立上ったが、背を向けたままの純樹が片手を振って拒否する姿に、彼の怒りらしき物を感じ取った。やはり強引過ぎたのか。それとも達彦との関係に対する考え方が気に障ったのか……。初めて男に冷たく拒絶された裕美は、悲しさと屈辱めいたものを同時に感じていた。

純樹と冷たい会話をした翌日、裕美は、小さな紙切れに描かれた地図を見ながら、閑静な住宅街を歩いていた。
一日の講義が終わり、学校の帰りに徒歩でやってきた。夏の斜陽を浴びながら、上賀茂神社から御園橋を渡り、そのまま直進して大宮通を少し越えた辺りを上がった。
加奈の書いてくれた地図に従って歩いて行くと、住宅街の途切れた辺りに二階建ての細長いアパートが建っていた。周囲には狭い畑もあって長閑な環境だ。建物も結構新しい。純樹の部屋は二階の奥と書いてある。階段も通路も外にあり、駐車場も隣接している。
純樹はまだ部活の練習をしている。だから、最初は郵便ポストにでもノートのコピーを入れて、さっさと帰る積りだったが、なぜか

ここへ来て躊躇してしまった。他に人影は見えないので、彼の部屋まで行っても誰にも会わずにすむのだが、踏み込む勇気が湧かない。本当は直接に手渡したいのだろうかと、そんな疑いを自身に問いながら腕時計を見た。後、三十分もすれば帰ってくるはずだ。とにかく彼が帰ってくるのを待って、ここで手渡そう。そう思って、道端の電柱にもたれかかったまま純樹を待つことにした。

折から吹き寄せる怪しげな風に、ふと、空を見上げた。さっきまでの憎らしいまでの暑い晴天が、俄かに黒ずんできた。夕立が来そうな空気だが、雨の降り出す前には、純樹が帰って来そうな予感がしていた。

だが、それは予感ではなく単なる期待だったのか、三十分が過ぎても純樹は帰ってこなかった。西の空が一瞬きらめいたかと思うと、ポツリと冷たいものが、腕組みをしている彼女の左腕に当たった。と、その途端に大粒の雨が降りつけて、見る見るアスファルトの路を小川に変えていった。しかし、裕美は小さな流れの中に足を浸したままでじっとしている。今しがた、純樹の驚く表情と、コピーを見て驚く顔を想像していたところである。今更帰るわけにはいかない。さりとて雨宿りするような場所もない。アパートの軒下は他の住人に声を掛けられそうで嫌だ。あっという間に髪がべっとりと重くなり、顔の上を雨の滴が流れ始めた。白いワンピースも次第に肌に密着してきて、背中や胸、腹部から下肢に至まで雨が流れ始めた。ノートのコピーだけは、しっかりとバッグに入れて胸に抱きしめている。

『あの人は何をしているのかしら？速く帰ってくればいいのに』

と、そんな風に思っていたのも最初だけで、下着まで濡れてしまうと、子供の頃に夕立の中で遊んだ開放感を思い出して、この時間が却って快感であったりした。

すぐに止むのが夕立だと思っていたのに、寒気を感じるまでに冷たい雷雨が降り続いた。こうなると裕美も意地になってきた。稲光にどきりと驚いた彼女は、

「真夜中になっても動かないんだから……」
と呟いてバッグを抱き締めた。
と、その時、唸るようなエンジン音と共に青いスクーターが水しぶきを上げて近づいてきた。思わず路に飛び出す裕美。ずぶ濡れの二人が見つめ合った。
「ノートの……」
純樹に問われる前に返答してしまった裕美は、彼に見つめられると、悲しくて涙しそうな心細さと、冷たい雨に濡れた惨めな切なさがこみ上げてきて、バッグをぎゅっと抱き締めたまま、壊れてしまいそうな心の衝動に耐えていた。
「とにかく中へ入りましょう」
そう言って純樹は彼女を導いた。裕美は俯いたままで彼の後ろについていくと、何だか後ろめたい気持ちに覆われて、ここへ来たことに後悔の感情が湧き始めた。
純樹がロックを外してドアを開けた。
「どうぞ、散らかっていますけど」
「いえ、いいの。これを渡しにきただけだから」
裕美が声にならないようなか細い声で、途切れ途切れに呟きながら、微かに震える手でバッグからコピーを取り出した。
「わざわざ持ってきてくれたんですか？雨の中を。どうもありがとう」
純樹が期待通り驚いた表情で裕美を見つめた。
「いいえ、雨は後から降ってきたの」
「そうですか」
つまらない会話しかできない自分を歯がゆく感じたが、白いワンピースが濡れて、白い下着の影が透けていることに気づいた彼女は、俄かに羞恥を覚えた。
「それじゃ、帰ります」
ちょこんとお辞儀をして背を向けた瞬間に、純樹の余りある力を左肩に感じた。

「何言ってるんですか、雷が鳴っているんですよ。おへそを取られたらどうするんですか！」
意味のわからない純樹の言葉を理解し終わらないうちに、彼女の身体はよろめくように引きずり戻された。
ドアが閉まる。狭いポーチに二人が突っ立った。裕美は目の前にある純樹の厚い胸に寄り掛かりたいような心細い緊張感に涙しそうになった。
純樹は靴を脱いで、靴下も手際よく脱いでから、そのくせシャツからは滴を垂らしながら畳の上を歩き回り、ジーンズとTシャツ、そして小さな箱を部屋の真中に放り投げた。
部屋は八畳くらいの和室と、その奥に二畳くらいのキッチンがある。彼はガスコンロに火を点けると、バスタオルを裕美の頭に被せた。
「奥にシャワーがあるので使ってください。生憎、間仕切りもカーテンも無いので、僕が買い物に行っている間に着替えてください。あのジーンズとTシャツはレディース用です。箱の中に新しい下着が入っていますから使って下さい。小さそうですけど、よく伸びるんでしょ？」
裕美は少し笑って、
「下着まで置いてあるのね、驚いたわ」
と、誰かと暮らしていたのかといった疑念を表情に浮べてみた。だが、そんな疑念の表情など全く感じ取れない風の純樹は、
「ブラはないのでTシャツをうまく使って下さい」
と言ってから、いきなり彼女のワンピースの裾を手にとって、
「失礼」
と言うや、ぎりぎりまで捲り上げて両手で滴を絞り落とした。驚いた裕美は、それ以上脚が見えないように両手でしっかりと腿の上を押さえた。
「どうぞ上がって下さい」
純樹は白い布地を放してから彼女を招いた。

「一応、畳の部屋なんでね、あまり濡らすのはよくない。濡れた物はあの袋にでも入れて下さい」
そう言う割には、彼はさっきから滴をばら撒きながら歩き回っている。
「カーテンを閉めてから着替える方が良いと思いますよ」
そういい残して純樹は出て行った。
　裕美はカーテンを閉じてから、背中のジッパーを開けかけたが、念のためにドアを開けてみた。と、驚いたことに彼は雨の中を傘もささずに、大きな背中を丸めてどこかに歩いてゆく。
「面白い人」
裕美は少し首を傾けてからドアを閉めた。そして、さっとワンピースを床に落とした。手早く下着も外した。男の部屋で、ひとり下着を外すスリルめいた感覚に、少し官能的な蠢きが、太腿の間を掠めていった。それにしても、どうしてレディース用のジーンズや下着が置いてあるのかちょっぴり気になった。
　さっと温かい湯を浴びた裕美は、バスタオルで全身を拭いてから下着を着けた。Tシャツは二枚用意してくれている。彼の言う上手く使えという意味がわかった。
　裕美はTシャツを一枚着てみる。自分でも大きいと思う胸は、Tシャツの薄い布を押し上げて、外から輪郭がわかってしまう。シャツを下から折り重ねるようにして捲くり上げ、胸のところで止めた。ちょっとしたさらし代わりになっている。そしてその上からもう一枚のTシャツを着た。純樹が帰って来た様子である。こんな技を理解している彼は、やはりここで女性と暮らしていたのではないか……。
「もういいですか？」
純樹が仕掛けていったやかんが音をたてて沸き始めた。
「ええ、どうぞ」
と、彼女が言い終わらぬうちに、大きな身体を屈めて彼が玄関をくぐってきた。裕美はやかんの火を止めた。

「ちょうどいいサイズじゃないですか」
手に提げたレジ袋をキッチンの流し台に放り投げてから、まじまじと見つめた。裕美は、Tシャツで工夫したので気づかれないはずなのに、ブラをしていないことの羞恥と、さっき感じた官能的な刺激が重なって、ほんの一瞬、性欲的な血流が背筋を流れた。
「少しゆったりしてるけど、楽でいいわ。今度は私が出ていくから速く着替えて。風邪ひくわよ」
「別に中にいても良いですよ」
「そう、でも私が迷惑だから」
「でしょうね」
裕美は夕立の激しい雨景色を眺めて、自分は何をしにきたのだろうかと疑念を感じた。だが真剣に考えようとはしない。何かを期待する自分がいて、それを否定する自分もいる。考えるのは無駄なような気がしている。
「ラーメン食べませんか？一緒に」
突然ドアが開くや否や、無邪気な純樹がにこりと笑って尋ねてきた。
「食べますよね」
と、一秒たりと待てない人なのか、勝手に決めつけて鍋に水を張り、コンロの火を点けた。
『やかんの湯はどうなったのかしら？』
部屋に入った裕美は、コンロから外されたやかんが湯気を吐いているのを見て不思議に思った。
「優しいのね？思ったより……」
裕美は部屋の様子を見ながら畳に腰を降ろした。純樹も狭いキッチンから和室に入ってきて、壁に立て掛けてあるこたつを倒して、部屋の真中に置いた。
「僕は優しくなんてないですよ」
少し間が空き過ぎている。
「マージャンばかりしているんでしょう」
「台が裏返っていたからですか？偶然ですよ」

にこりと微笑んだ裕美を見もせずに、純樹は座布団を敷いて彼女に勧めた。
「やっぱり優しい人だわ」
「座布団一つで優しい人になれるんですね。でも僕は、優しいて言われるのは余り好きじゃないんです」
「本当の優しさを求められるのが重荷だから？」
純樹はオーディオの音を鳴らしてからキッチンに向かった。
　裕美は、一生懸命にラーメンを作っている純樹の大きな背中を見ていると、ふと達彦のことが思い浮かんで来た。
「案外そうかも知れないですね、今まで気づかなかったけど。あなたは賢い女性だ」
背中で話し掛ける純樹に、達彦の拗ねた表情が掻き消された。
「映画かドラマのセリフよ、きっと……」
聞き流されたかと思っていた言葉を、じっと考えていたのかと思うと、彼のことが少し可愛く思えてきた。
「はい、具沢山ラーメンの出来上がり。キャベツと卵入りです」
「すごい……量……」
きっと二玉づつ入っているのだろう、山盛りになっている。
「頂きます」
「どうぞ」
裕美はほんの少しの麺を箸でつまんで口に運びかけたが、向かいに座っている純樹が、ふうふうと湯気を吹くものだから、彼女の顔に湯気がまともに掛かってくるし、麺が落ちる時のスープまで飛んでくる。呆れた裕美は、純樹を盗み見たが、いかにも美味しそうに無邪気な表情で食べているので、左に少しずれて攻撃をかわした。
「美味しいわね」
少しは位置の変化に気づくかと期待したが、
「その辺のインスタントと一緒にしてもらっては困りますよ、おねえさん！」
と、彼女のことなど全く気になっていない様子で語っている。

「どこが違うの？」
「値段が違う」
「そんな、普通ので良かったのに……」
申し訳無さそうな表情を浮かべて言った裕美は、レンゲでスープをすすった。
「半額なんです、普通のより」
純樹は子供みたいに笑って、麺の太い束を口に吸い込んだ。

欲望のとき（前書き）

純樹に一歩近づいた裕美だが、純樹には片思いの女性がいて、五年間も手紙を書き続けている事実を知る。だが、達彦に抱かれながらも純樹のことしか脳裏に浮かばない裕美はとうとう達彦との別れを決心する。若者の欲望が蠢くとき……。

欲望のとき

黒い軽四車が裕美の住むマンションの駐車場に滑り込んだ。
「どうもありがとう」
純樹が、同じアパートに住む友人から車を借りて彼女を送って来た。
雷はとっくに止んだものの、雨はしつこく降り続いている。裕美は礼を言ってしまったが、もう少し純樹と一緒にいたい気持ちに邪魔されて、ドアを開けるタイミングをつかめないでいる。純樹は純樹で、何を言うでもなく、フロントガラスを流れ落ちる雨の滴をぼんやりと眺めている。裕美の知らないジャズのリズムだけが、狭い車内に気だるく響いている。不自然な静けさであったが、裕美はただじっとしていた。
「試験が終わったら泳ぎにでも行きましょうか？」
純樹がひとり言のように呟いた。
「連れていってくれるの？」
裕美は爽やかな目眩を覚えた。
「運転手くらいなら勤めさせて頂きます」
「うれしいわ」
彼女の弾んだ声がジャズの単調なリズムを消し去った。
「達彦には内緒ですよ、絶対に」
とてもクールな表情で彼は念を押した。
「もちろん」
裕美の心は既に青い海を泳いでいるようだ。
「ところで、全く関係のない話だけど、純樹さんはどこの生まれ？」
漸くドアを開けて、左足を路面に着けた彼女が卒然と問い掛けた。
「富山県の氷見という所です。小さな漁師町ですけど」
「氷見！氷見のどこ？」
なぜだか、裕美の心眼がきらりと異様な輝きを放った。
「港の近くですけど……」

「海沿いの神社の側に公園がなかった？」
「ええ、ありますよ。何でそんなことを知っているんですか？裕美さんも富山の出身ですか？」
純樹の瞳が、同郷の友を求めるような親しみのある光を放った。
「いえ、私は四国の出身。叔父の家が氷見にあるの。小さい頃はよく遊びに行ったのよ。晴れた日には富山湾を超して、立山連峰が見える所でしょ？とても奇麗だったのを覚えている。蜃気楼も見たわ」
「へえ、偶然ですね」
だが、言葉の割には、純樹はほとんど関心を示していない。が、裕美は万に一つの奇跡に巡り合ったかのような、不思議な気持ちに舞い上がって、夢うつつに歩き始めた。
「さようなら」
純樹が掛けた声に振り向いた裕美は、瞳を潤ませて微笑んだ。

裕美は部屋に戻ると、バスタブに湯を張って、ゆっくりと身体を温めた。夕立にさらされて、身体の芯が冷え切っているような感じがした。湯に浸かった彼女は、不思議なくらいに心身が軽くて、自然に鼻歌が零れてきたりして、自分でも可笑しいほどだった。
入浴後、Ｔシャツとピンクのパンティ姿で、よく冷えたワインを少し飲んだ。丸いガラステーブルが一つと、ゆったりとすわれる肘掛つきの椅子が二つ置いてある。彼女の部屋は六階なので、窓から街の灯かりが見渡せる。オーディオプレーヤーの電源をＯＮにした。今の気分とは裏腹に、流れる音楽はどこかもの悲しい旋律であった。そのマイナー調の音律の中に、今の、宙を舞うような軽い心持ちを綴り織りながら、白ワインを口に運んだ。
わずかの間、割に気取った雰囲気で夏の夜を楽しんでいたが、そこへ興醒めな携帯電話の呼び出し音が響いた。達彦だ。着信音で識別できるようにしてあるのですぐにわかる。純樹の所へ行っている間は電源を切っておいたから、彼の機嫌が悪いことは予想できた。
「あら、達彦さん」

自分でも空々しい程の明るさで応対した。
「あらじゃないよ、どこへ行ってたんだ？」
「ちょっとお散歩に」
「雨の中を？」
「雨は後から降ってきたのよ」
裕美は純樹の前で口走ったことを繰り返した自分を秘かに笑った。
「寄ったんだよ、練習の帰りに」
怒気を含んだ彼の声が哀れに聞こえる。
「そう、ごめんなさいね」
いつもに比べて心に余裕のある裕美は、子供じみた達彦と同列の会話はしなかった。
「今から行くからな」
いつものことながら強引で我侭な男だ。
「だめよ、今日は。すごく疲れているの」
そう言った瞬間、携帯の向こうにある達彦の表情が、すぐさま不機嫌で拗ねた様に変化していることが、手に取るように感じ取れた。
「お願い、今夜はひとりにして欲しいの」
裕美は甘えるような声を出して懇願した。
「最近、二人きりで会っていないだろう」
暗い彼の声が、幸福だった裕美の心を急速に沈めてゆく。
「あまり会いたくないの」
彼女の心は幸福の分水嶺を越えてしまった。
「どういう意味だ」
折角、純樹と心を通わせることが出来て、二人の緊張した時間を過ごすことが出来た彼女は、ほんの、ほんの僅かな幸福を楽しんでいただけなのに、何でこの男が割り込んでくるのか……。裕美は先ほどまでの幸福な気持ちを壊された怒りが急激に込み上げてきた。
「意味なんてないわよ！誰にでもあるでしょ、そんな気分の時が！」
裕美は大声で怒鳴って、最後まで言い終わらぬうちに携帯電話を切った。そして電源をオフにする。

まだ怒りで手が震えている。裕美は大きく深呼吸をして携帯電話を静かにガラステーブルに戻した。決して達彦が嫌いな理由ではないが、最近特に、彼の子供じみた態度が癇に障る。我侭で甘えた態度が嫌であった。本当は自分が彼に我侭言って甘えたいくらいなのに、同じ年の男子では、いつの間にか女の方が大人になってしまう。

少し苛々したためか、ワインを口に運ぶペースが俄かに早くなって来て、ＢＧＭも激しい曲に変えた。

一度荒れてしまった気分は、もう、純樹を思う幸福な状態には戻れない。彼女はグイグイとワインを口に運んで、三十分もするとワインを飲み干してしまった。それでも物足りなくて、カミューのナポレオンを持ち出してきた。

裕美は高知の出身である。遺伝的にも酒には強い。彼女の両親も酒豪であるし、子供の頃から飲方を教えられてもいた。

裕美は一人娘ながら、京都で一人暮らしをさせてもらっている。しかも、バスもキッチンも備えた、学生には少々贅沢なマンションに住み、バイトもせずに十分過ぎる仕送りをしてもらっている上に、自動車まで買ってもらえる結構な身分であった。

彼女の両親は、高知では中規模の運送会社を経営していた。裕美は、両親に感謝はするものの、決して自分が幸福だとは感じていなかった。

両親は自分を大切に育ててくれた。だが、自分でも我侭に育ってきたことは自覚している。そのためか、昔から本当の友ができなかった。男女を問わず、後一歩の譲歩が出来ない。相手を許せない。自分の思い通りにならないとどうにも我慢ならない。

いつも反省するものの、我侭な自分が動き出すともうどうにも制御できないのが常であった。そうやって、今まで多くの女友達を失い、彼氏と別れてきた。

このままではだめだと考えたから、達彦の我侭にも耐えてきた。彼の子供じみた態度が気になり始めてから約一年は耐えている。だが、もう限界のような気がしている。そして、もっと困ったことに、

純樹を欲しいという新たな欲望が芽生え始めていた。彼女はもうわからなくなってきた。一体、何を、どこまで我慢すれば良いのか……。

そんな、答えの出ない問答を頭の中で繰り返すうちに、次第にアルコールが回ってきて、考えることすら馬鹿らしくなってきた。そして、ひたすら純樹の姿を思い起こし、二人で過ごした時間の肌の感触を思い起こしていた。音楽が止まって沈黙に囲まれながらも、ゆっくりとアルコールを心に流し続けた。

やがて、純樹の姿も虚ろになり、眠気を覚え始めた裕美は、電灯を消すのが精一杯で、そのままベッドに倒れ込んでしまった。

裕美は熱い夢を見た。純樹の部屋で口づけされ、そのまま抱かれる夢であった。それが妙に現実感のある体感的な夢であったためか、冷房が切れたためか、ふと、蒸し暑さに目を覚ました。

午前二時。飲み過ぎたのか、喉の渇きを覚えて冷蔵庫の麦茶を二杯飲み干した。再びベッドに戻ったが、暑さのために眠れない。冷房は余り好きではないので窓を少し開けてみた。遠くで響く救急車のサイレンが届いてくるほど周囲は静かであった。自分の咳払いが夜空にこだまするのではないかと感じるほどだ。

そして暗闇。裕美は眠るときには真暗にする。レースのカーテン越しに、微かに街の明かりが入いるのでちょうど良い照度だった。

裕美はさっき見た夢を思い出した。官能的な快感が身体のどこかに残っていて、胸の鼓動が高まっている。

ふと昼間の出来事を思い出した。不意にスカートの裾を持ち上げられた時の驚き。純樹の部屋で下着を外した緊張感。Tシャツの膨らみにさり気なく視線を落とされた時の羞恥。

彼女は眠れないままに何度も寝返りを打ち、眠ろうと努めるが、鼓動が大きくなるばかりでいっこうに眠くならない。そうして彼女はいつのまにか純樹に抱かれる場面を想像していた。無意識のうちに薄手の羽毛布団を太腿で挟んでいる。

自分勝手な想像をしながら、布団の柔らかな感触に控えめなうめき声を漏らしていたが、次第にいつもの自慰行為に移っていった。
中学生の時に初めて行なってから、月に何度と無く行なってきた行為である。自分を快感に導く手順や刺激するポイントは良くわかっていた。彼女はいつもの手順で自らを高めていった。
だが、酒に酔っているためか、気分の高揚と共に振舞いが大胆になってきた。彼氏に抱かれた時に激しく乱れたことは何度もあるが、自慰行為で乱れたことは少ない。しかし、今夜は男に抱かれているような錯覚に陥って、今までに無いくらい大声を出し、ベッドが軋み、汗をかき、淫らな言葉をはいて指をしゃぶった。
めったに使わない、隠し持っている器具を取り出してきて、男に抱かれる体感を得ながら悶えた。少し開いた窓から外に声が漏れていることにも高ぶった。何度果てても果てても果て尽きない自分をいろんな術で責め続けた。そして何度も歓喜の声を放ってベッドにうつ伏せになった後、呼吸が鎮まるのと同時に深い眠りに沈んでいった。

「お疲れさま！」
純樹の発声で全員がグラスを掲げた。結局今年はリーグ戦での優勝はならず二位で終わった。純樹が入部してからは一度だけ優勝経験がある。最後の年は優勝で飾りたかったのだろうなと、やり遂げた満足感で満ち溢れた純樹の横顔を見ながら、裕美は彼の心情を汲み取った。
今夜はリーグ戦の打上げコンパで、女性も多く参加している。河原町にある、バレー部常連のイタリアンバーに五十人ほどが集まり、若くて熱い熱気を発して賑やかなパーティーを行なっている。
裕美は、肩まで届くくらいの髪を後ろで束ねて首元をすっきりとさせていた。身体の線もやや細めで、胸の大きさも、男の視線が自然に集まるほどに自身はあった。だから、今夜は胸元がルーズなノースリーブのカットソーを着て、胸の膨らみを露出している。更に

自信のある、均整のある脚を見せるために、かなり大胆なミニスカートを履いていた。心のどこかに、純樹に見てもらいたいという潜在意識があったのかも知れない。

リーグ戦の勝ち点は同じで、得失点差で惜敗したこともあって、部員の誰もが、無念さを晴らすように盛り上がって馬鹿騒ぎをしている。店内は一瞬にして大宴会場となり、あちらこちらで笑いの渦が巻き起こっている。

裕美の隣には達彦が座っているが、後輩たちが次々にやってきては裕美の美貌を讃え、セクシーな胸元を眺めてから、羨ましいと達彦に言っては、酒を注いで去っていった。逆に四回生が来ると、達彦がビールを注ぎ裕美が愛想笑いを浮かべてもてなした。

裕美の心は、純樹の横で虚しく口を開けている空席に固執していた。八人テーブルが並んでいるのだが、彼の席は隣のテーブルである。出来るなら純樹の隣に座って酒を飲み、彼と会話して、後輩たちの羨望を集めながら楽しみたい。裕美の周囲では、達彦を中心とした会話が盛り上がっているが、裕美の心はここにあらず、純樹の様子をぼんやりと眺めてた。

純樹は酒が入ると、実に陽気になって馬鹿騒ぎをしている。バレーをやっている時のように無邪気で純粋な瞳だ。純樹が時折見せる、どこか寂しげで孤独な瞳は今夜は全く窺(うかが)えない。

「おい、注いでくれよ、さっきから空になっているよ」

と、達彦が空になったグラスを目で刺しながら、半ば冗談のように明るい声で催促した。

「飲みたければ自分で注ぎなさい。私はホステスじゃありません」

と、ビールくらい注いであげれば良いのに、ぼんやりと純樹に思いを馳せていた彼女は、不意を突かれて本音が出てしまった。

一瞬覚めた空気が広がって、ちらりと純樹の視線を感じはしたが、すぐに一回生がビールを注ぎながら冗談を飛ばして、場を和ませてくれたので、達彦もすぐに気を取り戻して下級生たちと下らない話を再開し始めた。

皆は程よく酔ってきて、席移動が更に活発になってきた。裕美もさりげなく立上り、グラスを片手に純樹の隣に移動してみた。
「今回は残念でしたね、みんなとても頑張ったのに。私、大学生のバレーボールの試合を見るの初めてだったの。とても面白かった」
裕美は結局、試合会場に三回足を運んで、達彦に弁当も作ってあげた。だから他の部員の名前と顔やプレーにもかなり親しんでいる。
「とにかく、お疲れ様でした」
彼女はそう言ってグラスを差し出した。
「応援ありがとう」
純樹もビールグラスを持って軽く合わせる。裕美はスコッチウイスキーのロックを少し口に含んだ。テーブルを照らすスポットライトの光線が、ロックアイスの複雑な屈折を通って、琥珀色の優雅な輝きを放っている。
「バレーをやっている時の純樹さんは別人みたいね。とても素敵だったわ」
少し酔っているのか、自分でも大胆に思えるほど素直に心音が言葉になった。
「じゃあ、バレーをやっていない時の、別人の僕は素敵じゃないのですね？」
彼はにこりと笑って裕美の瞳を見つめた。
「意地悪ね」
彼女も微笑んでからじっと純樹の瞳を見つめる。
「好きですからね、バレーが……。他には何も能がありません」
純樹はそう呟いて、少し悲しい影を瞳に浮かべたかと思うと彼女から視線を外した。そして、ビールをグイと飲み干してから、
「じゃあ、また」
と、再び元の笑顔を浮かべて席を立ち、久美子の彼氏がいるテーブルに移動して一回生の膝の上に座り込んだ。
　裕美は、全身に冷水を浴びされたような衝撃が身体中を通り抜けたが、きっと達彦の目を気にしているのだと自分に言い聞かせて、

静かにウイスキーを流し込んだ。
　そこへ達彦がやって来て、さっきまで純樹が居た席にどっかりと腰を降ろした。
「振られたのか？本宮さんに……」
微笑みながら達彦が呟いた。だが、裕美はそんな言葉には構わず、
「どうして純樹さんには彼女ができないのかしら？いい人だと思うけどな……」
と、後輩たちと戯れている純樹の様子を遠めに見ながら呟いた。
「純情なんだよ、あの人は。不器用と言う方が正しいかな」
スモークサーモンを口に運んだ達彦が小声で答えた。
「純情だと恋人できないの？それとも不器用だから？」
裕美もフライドポテトをつまんだ。
「今は片思いなんだよ。ずっと思い続けている彼女がいてね。高校時代の同級生なんだけど。ずっと手紙を書き続けている」
裕美には、一瞬すべての物音が消えたような、静かな衝撃が走った。
「高校一年の時からつき合っていた。俺が入学した時には、校内でも有名なカップルだったよ。本宮さんは既に全国レベルのプレーヤーだったし、彼女もテニスの上手い人で、とてもきれいな女性だったから、皆二人のことを最強のカップルだと言っていた」
「あなたも憧れていたの？」
「そうだな。素敵なカップルだと思っていたよ」
裕美は達彦の方は見ないで会話をしている。
「違うわよ、その女性にあなたも憧れていたの？」
「俺も彼女を初めて見た時には驚いたよ。とてもきれいな人だった。俺たち後輩にも優しくしてくれて、もう、女神の域だったな」
達彦は懐かしそうな声で答えている。
「で、その女性に純樹さんが振られたのね？」
「高校三年の夏にいろいろあってね。それが原因で別れたようだけど、それでも先輩は彼女に手紙を書き続けた。未だに書き続けている。一度だって返事を貰ったことはないそうだ」

「三年の夏に何があったの？」
「さあ、俺の口からは言えない」
達彦はちょっと溜息混じりに呟いてからグラスを口に運んだ。そして、
「もう、五年だよ。もう良いと思うけど……」
と、小声で呟いてから裕美の手を握った。
「あなたは、一度だってそんな一途な気持ちになったことはないでしょうね？器用だし」
そう笑ってから、さり気なく彼の手を解いた。
「俺はいつも君に一途だよ」
裕美は返す言葉を見出せないほど、達彦の言葉が馬鹿らしかったが、彼も酔いが回り始めたようなので、
「もう少しゆっくり飲みなさい。明日が辛いわよ」
と、優しく言った後、彼のグラスに水を注いだ。そして彼をそこに置き去りにして、久美子の隣に移って女たちの会話に入っていった。

裕美は皆の会話に笑顔で頷きながらも、純樹が別れた女に五年も手紙を書き続けているという事実を知って、心の中にぽかりと空間が出来たようで、アルコール以外には何も入ってくることは出来なかった。

ドアにロックを掛けた途端、達彦が裕美を抱きしめて唇を重ねてきた。とても強い力で息苦しいほどの抱擁である。打上会が終わって皆は二次会へと勢いを盛り上げて行ったのに、裕美は、酔いつぶれた達彦を送って行く羽目になった。彼の部屋へ向かおうとすると執拗に反抗して、どうしても裕美の部屋に行くといってきかない。酔払いを相手にしても仕方ないので彼の言う通りにした。
狭いポーチに立ったままで、暗闇の中、達彦はしつこく口づけを続ける。
「苦しい、放して！」

と、逃げるように部屋に入った裕美は灯かりを燈した。達彦が彼女の部屋に泊まるのは初めてではない。
「そんな所にいないで早く入ってきたら？」
壁にもたれ掛って、半ば眠っているような達彦に声を掛けながら、自分は手際良くパジャマに着替えて、蒲団を一組床に敷き、寝支度を済ませてからさっさとベッドに潜り込んだ。
やっと達彦は靴を脱いだかと思うと、キッチンの床に座込んでしまった。
「風邪ひくわよ、お蒲団敷いたから早く寝なさい」
割に優しい声で叱ってから灯かりを消して目を閉じた。裕美も少し飲み過ぎたのか、目を閉じると天井が回っているような感覚が走り、深い眠りに引き込まれていった。
突然、ずっしりとした重みと息苦しさに目を覚ます。達彦が彼女の上に乗りかかり、口を塞いでいた。
「だめよ、酔払いはそっちで寝て頂戴」
と、何とか唇を外して冷たく言い放ったが、元より、百八十センチを超える大男の身体を跳ね除けることなど出来ない。そのまま、達彦の成すがままに身を委ねるしかなかった。いつの間にか、裕美の閉じた瞳の裏側には、純樹の表情が浮かんでいた。彼女は心を純樹に寄せながら、身体は達彦の愛撫に悶えた。
酒のために本能的な欲望に駆られた二人は、動物的な激しさでその欲望を満たそうとした。裕美は、先日、自分で自分を愛撫しながら、このベッドで悶え狂ったことを思い出し、今もあの時のように自慰行為をしているのだと自分に言い聞かせた。
達彦に抱かれているのではない。自分で愛撫しているのだ。そして、脳裏では純樹に抱かれることを想像している。決して、今、自分を抱いている男を純樹とは思いたくはない。二人を重ねることは許されない。達彦を純樹と思うことなど出来ない。自分を貫いているのが秘密の器具だと思うことの方が納得できた。
裕美が何度も声を放って痙攣した後、ようやく彼も欲望を果たし

た。そして、ばたりと倒れこむようにして彼女の横に寝転がった。
何とも居心地の悪い、興醒めな空気が裕美の素肌をゆっくりと冷やしていく。
「もう私たち終わりね……」
裕美が寝返りを打って彼に背を向けた。
「終わりにしたいのか？」
達彦は仰向けになった。まだ大きく呼吸している。
「ええ」
裕美は自分でも驚くほどきっぱりと答えた。
「本宮さんに惚れたんだろう？」
裕美はふっと笑いを零し、
「あんな人のこと、何とも思ってないわよ」
と、冷たく言い放つことで、純樹に、惚れた女がいるという事実を知った空虚な心が少し癒された。
「俺に抱かれるのが嫌か？」
「ええ、あなたの性欲の処理係はもう嫌よ」
「その割には激しく反応していたじゃないか」
達彦は大きく深呼吸をした。裕美は、余りに次元の低い言葉に辟易（へきえき）して、もう言葉を交わす気にもなれなかった。
「俺は愛しているよ。君が何と言おうと……」
達彦は彼女の髪に手を伸ばして、優しく撫でながらささやいた。
「あなたが愛しているのは、私の素直な身体だけよ。それはあなたが一番わかっているでしょ？」
達彦の手を振り払った裕美は、タオルケットを身体に巻き付けて彼に背を向けたままで小さく丸まり、完全拒否の姿勢を示した。
「最近の君はどうかしてるよ……」
彼は、どうせ答えてくれない虚しい言葉を彼女の背中に投げつけた後、ベッドを転がり落ちて、床に敷かれた蒲団で大の字になって爆睡を始めた。

裕美は、少し涼風が吹き始めた夕暮れ時分に、いつもの散策路をゆっくり歩んでいた。

故郷の母から手紙が来ていた。取り立てて大事な内容でもなく、こちらの近況報告も欲しいといったことが書いてあったような気がする。左程注意深く読んではいない。一々手紙に書かなくても、しょっちゅう電話も掛かってきて、母とは会話をしている。

賀茂川の堤は青臭い香りの雑草に満ちている。大きく伸びをしてから崩れるようにベンチに腰掛けた。

裕美は二人の男のことを考えた。昨夜の、達彦との疎ましい会話が蘇ってきた。一方の純樹はそっけないどころか、更に遠くに離れたような気がする。彼女の前を、老女がのっそりと腰を曲げて過ぎて行った。

達彦とはもう別れても良かった。 随分前からそう思っていたような気がする。出来るだけ達彦を傷つけずに自然に別れたい。そして出来れば純樹とつき合ってみたい。

しかし、そんな恋愛を繰り返してみても、別れるだのつき合うだのを繰り返してみても、実は何の解決にもならない。

自分の力ではどうにもならない問題がある。橘昭（たちばなあきら）という男の顔が微かな記憶から浮かび上がってきた。

京都の国立大学卒の、細身で小柄、銀縁眼鏡をかけた神経質そうな秀才。真面目だけが取り柄のような物静かな男であった。

彼は裕美の故郷である高知で、彼女の実家の稼業と同じく運送業を営む『橘運送』の長男である。実際のところ、橘運送が裕美の所へ多くの仕事を流しており、会社の規模も比にならないほどの差があった。たまたま、裕美が高校生の時に橘一家が訪れてきて、昭が彼女に一目惚れした。

昭は裕美より六歳年上で、その時既に稼業を継いでいた。裕美は、子供ながら、稼業の八割が橘運送から回ってきていることも、橘家と姻戚関係になれば両親が楽になることもわかっていた。

裕美にとって昭は空気のような存在であった。決して嫌いでは

なく、かといって好きになる要素は何も無かった。しかし、昭と結婚すれば両親は喜ぶことは十分想像し得た。

勿論、両親は強制などしないし、裕美の選んだ男と結婚すれば良いと言ってくれる。だが、彼女はそんな両親の本心も悟り得たし、両親のために、自分の人生の一部を歪めることも決して厭わなかった。だが、それが正しいことなのかどうか、まだ高校生の裕美には判断できなかった。

それゆえ、故郷を離れた大学を選んだ。故郷を離れ、いろいろな体験をしてから決めようと考えていた。数年なら、働く期間も許してくれそうだ。その間に、両親の隠れた期待をも覆すほどの王子様が現れるか、昭に良縁が訪れて裕美のことを忘れるか、何の変化も起きずに、結局昭と結婚することになるのか。

高校三年生だった裕美は、とにかく時間稼ぎのために大学へ来たようなものである。

母親の無邪気な手紙の行間を、勝手に猜疑の目で読んでしまう自分が悲しくもあった。また同時に、王子様など、本当はこの世に存在しないものだという実感も湧いてきて、涙しそうになった。

達彦などは、性欲を満たすために自分に媚びているような男であるから、結婚とか稼業を継ぐとか、生臭い話しになると途端に逃げて行くだろうなと、昨夜の激しい行為を思い浮べたが故に、余計に達彦のことを疎ましく感じてしまった。

片や、純樹の方はと言うと、彼女にとっては十分に王子様たる魅力はあるのだが、本人は、いつまでも過去の女の呪縛から開放されずに、未練たらしく手紙を書き続けているらしい。

昨夜の達彦との行為を、体感的に思い出してしまった裕美は、純樹は、若い男性として当然持っている達彦の如き野生的な性欲を、どのように処理しているのだろうかと、今まで思ってもみなかった想像を巡らしてしまった。

彼女は一度だけ、男性のそういう場面を偶然見たことがある。ある夜、達彦に執拗に迫られたが、どうにもその気になれず拒否し続

けた。ようやく彼が諦めてくれて彼女は深い眠りに陥ったのだが、ふと真夜中に覚醒した折、自分の横で激しい息を吐きながら、彼が自分自身を愛撫している姿を見てしまった。裕美はその時身動き出来なかった。なぜなら、達彦の虚ろな瞳が、めくられた掛布団から露出した、彼女のパンティの膨らみを凝視していたからである。

今、そんな思い出を掘り起こしながら、達彦の姿に純樹を置き換えてしまい、あの時の達彦のように、純樹が悶々と悶えているのかと思うと、彼女も切ない火照りを感じてしまうのであった。

だが、純樹の想像している妖しい肢体が、別れた女のものであるのかと想像した瞬間、氷の湖にでも飛び込んだような冷たさと、どうにも治まらない嫉妬の熱い炎が心の中で交差して、不安定な裕美の精神を、益々混沌とした迷路の中へ導いていった。

隔たりのとき（前書き）

裕美は純樹と念願のデートに出掛けるがすぐに喧嘩してしまう。どうしても自分の思い通りにならない純樹に我侭な自分が表れてしまう。だが、心秘かに感じていた万に一つの奇跡が起こった。

隔たりのとき

早朝から身を刺すような陽が照りつけている。試験も終わり、後は夏休みを待つばかり……。裕美の持つ軽自動車に乗った純樹と裕美は、晴れ渡った青い空気を引き裂くように、遠慮なく鯖街道を疾走していた。

「天気が良くて良かったわ」

「毎日飽きるほど晴れているのに、今日だけ雨だったら案外面白いかと思ってたのですけどね……」

全開した窓から、夏にしては爽やか過ぎる位のさっぱりした気が、裕美のさらりとした髪を執拗なくらいに揺り動かしている。

「Mぽいところがあるのね」

「まあ、体育会系ですからね。あんなきつい練習を喜んでやっているのだから、ある意味Mかもしれませんね」

純樹はそう言って口元を緩めた。彼は濃いサングラスを掛けいるので表情がよく読み取れない。

今日の純樹はとても素直に応対してくれる。そしてとても優しい。この前彼のアパートにノートをもって行った時のようだ。

「泳ぐのは得意なの？」

「海のそばで育ちましたから。でも、正直海は飽きてしまいましたね。いえ、今日は別ですよ。可愛い女性と一緒ならぜんぜん飽きない」

「へえ、純樹さんがそんなこというんだ」

裕美は今の純樹に満足はしているが、どこか落ち着かない空気を感じる。いつもの純樹と違いすぎる。達彦が一緒にいる時に冷たくするのは当然としても、学校で出会った時なども、純樹の態度は素っ気無い。一体、どちらが本当の純樹の気持ちなのだろうか。

裕美はふと、純樹は自分をもてなしてくれているのかも知れないと言った疑問が浮かんできた。無理に優しく接して、今日一日、自

分を楽しませようとしているような気がしてきた。それならそれで、彼の好意に甘えようという気持ちと、行きたくもないのに海水浴につき合ってもらって、作り笑顔に騙されて喜んでいる自分を許せない気持ちとが葛藤を始めた。

裕美は、濃いサングラスを掛けた純樹の横顔をさりげなく見つめながら、

「とても冷たかったわね？この前は」

と、まずは純樹が冷たい態度を取るときの理由を確認しようとした。

「この前？」

彼のとぼけた声に白々しさを感じながら、

「リーグ戦の打上げパーティーの時」

と、冷たい声で彼を刺した。

「僕が何かしましたか？」

「何もしなかったから悲しいのよ、心は空っぽのままでしか話してくれなかったし、すぐに離れていった……」

「空っぽじゃなかったですよ。緊張していました」

「緊張？私が恐いの？」

裕美はそう言って軽い声を零した。

「達彦の前で、あまり仲良く話せないでしょう」

真直ぐに前を向いたままの純樹が、静かに言った。彼女は、予想通りの回答に満足する。わかっていても確かめたかったのだ。やはり、達彦のことを気にしていたのだ。高校時代からの後輩であるから当然のことだ。裕美はパーティの夜に傷ついた心が修復される喜びをしばらく楽しんでいた。

「どうして私を誘ってくれたの？」

傷が修復できた彼女は、今度は彼の前向きの言葉が欲しくて、少々性急だと思いつつも投げ掛けてしまった。

「お礼ですよ。雨の中で僕なんかのために待っていてくれたから。ノートを抱えて……」

裕美の心に、氷のナイフで切りつけられたような鋭い痛みが走った。

「そう、お礼なんてしなくても良いのに……」
裕美の言葉は窓から吹きいる風に流されてしまったかのように、純樹は無言のまま車を走らせる。
　もう一言欲しいのに……。彼は何も言わない。裕美はそんな感情を上手く表わせずにじっと俯いている。
『君が好きだから』とか『二人でゆっくり話したかったから』とか、少しでも自分に興味を持っている意味の言葉が欲しかった。純樹がそんな言葉を口に出してくれることを期待して待っている。
だが、彼は何も言わない。ただ黙って運転している。音楽と風の音だけが車内に虚しく響いている。裕美はそんな沈黙が嫌で、自分から口火を切った。
「本当は行きたくないんでしょ？私なんかと……」
裕美はそう言った瞬間、自分を殴りつけたくなるような怒りを覚えた。どうしてもっと素直な言い方が出来ないのか、思いとは裏腹の言葉を吐いてしまうのか。
「そんな事はないですよ。あなたみたいに可愛い女性と泳ぎに行くのを嫌がる男はいませんよ」
純樹の言葉はいつもの素気ない雰囲気に戻っている。やはりこれが、彼の自分に対する自然な態度なのだろう。黒いクラウンが二人を猛スピードで追い越して行った。
　裕美の脳裏には、片思いの女性に思いを馳せて手紙をつづっている純樹の姿が浮かんだ。この前勝手に想像した、片思いの女性の肢体を慕って自慰行為をしている純樹が浮かんだ。
「帰りましょうか……」
二人の車は朽木を抜けて近江今津を過ぎ、敦賀を目指して走っている。
「何だか楽しくない」
裕美はもう自制心が利かなくなっている。我侭で、一歩も譲歩できない嫌な自分が表に出ている。実際、心が重く憂鬱でもあった。だが、決して本当に帰りたいわけではない。もっと純樹に優しく接し

て欲しい。作り笑顔ではなく、本当の笑顔が欲しい。他に好きな女がいても良い。自分にも興味を持って欲しい。今日一日は彼女のことは忘れて欲しい。

「帰りたいんですか？それなら引き返しますけど」

純樹はクールな口調で淡々と、彼女の心に棘刺す言葉を吐いた。この男は彼女の心を寸分たりと理解できないのか、それともすべて読み取った上でなおかつ素気ない態度をとっているのか。今までの男なら、裕美が少し拗ねた言葉を吐くと、何とか機嫌をとって仲良く過ごせるように努めたものだ。

「私はどちらでも良いわ、あなたの好きにして」

そう言って裕美は前を見つめたまま口をつぐんだ。純樹も無言でハンドルを握っている。車内には、この場に不似合いな楽しそうな音楽とエンジン音、風の流れる音、そして裕美の心が軋む音が響いている。裕美はちらりとサングラスの隙間から純樹の瞳を覗いた。無表情だ。しかし、彼はUターンするわけでもなく、ひたすら車を走らせる。

裕美は、引き返す様子のない純樹がどのようにしてこの空気を変えるのか、拗ねた態度を貫きながら観察していた。

沈黙の時間が続いて彼女の気持ちも少し落ち着いてきた。我侭が過ぎた自分を反省し始めてもいる。動機は何であれ、純樹がデートに誘ってくれたのだ。彼の思いやりに感謝すべきなのだ。もう、作り笑顔でも良いと思った。もう、自分に興味を持って欲しいとも思わなかった。不器用でもいいから、この空気を変える努力を純樹にして欲しかった。拗ねた自分をあやす努力をして欲しかった。そうしたら、自分も元通り素直になって、彼の作り笑顔に乗せられて、今日一日楽しもうと考えていた。

音楽CDが終わって気まずいしじまが流れた頃、純樹は国道沿いにあるコンビニの駐車場にハンドルを切った。

「最後の曲が好きなんですよ」

彼はひとり言のように呟いてからサイドブレーキを引いてドアを開

けた。何か買い物でもするのか、裕美は呆然と彼を見つめた。
「僕は電車で帰ります。来た道を戻るか、この道を下って大津から山中越えをすると京都に戻れます。あっ、気を悪くしないで下さいね。別にあなたを嫌いな訳じゃないんです。ただ、僕は女性が苦手なんです。不器用な男ですから、心の駆引きなんて出来ないんです。ごめんなさい」
そう言って彼女に背中を向けたまま、国道を渡って、マキノ駅と書かれた標識の示す方へと歩いていった。
裕美は言葉を失ったまま、凍りついた谷底に突き落とされたようなショックを受けた。信じ難い純樹の仕打ちである。悲しみよりも、悔しさよりも、憎悪に近い感情が涙を絞り出させる。
確かに自分の我侭が原因であるが、少しくらい我侭をあやす余裕もない男なのか。本当に不器用な男だ。彼女も自分を反省してやり直そうとしていたタイミングであるだけに余計に許せなかった。
裕美は涙が頬を流れる前に運転席に移り、いきなりアクセルを踏みつけ、窓より吹き入る風の勢いで涙を吹き飛ばした。どこへ行くのかわからない。ただ、純樹から少しでも遠くへ離れたかった。自分が軽々しく扱われた過去から少しでも速く逃げ出すように右足を強く踏みつけた。
琵琶湖の面は、やや高くなった朝陽に照らされて、きらきらと眩げに輝いている。彼女は小一時間疾走し続けたが、やや怒りも沈静して冷静さを取り戻したのか、喉の渇きを感じて湖畔の喫茶店に車を寄せた。
湖を見渡せる窓辺の席に座ってオレンジのフレッシュジュースをオーダーする。店内は割りに空いていた。どのテーブルも小さめで足元が良く見える。
少し離れた席に、小麦色に日焼けしたサーファー男が水色のアロハシャツを着て煙草を吸っている。その男の背中越しに瑠璃色の湖面が見晴らせた。水色の男に、お手洗いから戻った若い女性が歩み寄った。派手なオレンジ色のアロハシャツを着た健康的な女だ。

席に着いたその女は、水色男の手に自分の手を絡ませて幸せそうに微笑みながら甘い声で何やら戯れている。裕美は、暑いのになぜか鳥肌が立ってきた。

裕美はフレッシュなジュースをストロで一息だけ吸った後、煙草を取り出して薄いゴールドのライターで火を点けた。滅多に吸わない煙草だが、イラついた時には手が出てしまう。たった三口、深く肺に沈めただけで灰皿に怒りを押し付けた。純樹への怒りは鎮まったはずなのに、いちゃつくカップルを見て怒りが蘇ってきた。

裕美はジュースを半ばまで一気に飲んで、大きな溜息を吐いた。

もう一本煙草を取り出す。今度は静かに吸った。頬杖ついて、ぼんやりすると、空っぽの頭にどうしても純樹のことが浮かんできてしまう。もう忘れよう。そう決心したいのだが何かが引っ掛かる。何か物足りないものがある。諦めてしまうには、何か釈然としないわだかまりが心の奥底に残っている。

さっきのサーファーがちらりと裕美の放心状態の表情と、テーブルの下で、ミニスカートから伸びているすらりとした脚を盗み見ている。純樹に自慢の脚を見せるためにタイトミニを履いてきた。

裕美は、わざと組んでいる脚を解いて膝を緩めに閉じた。男の席からはきっとパンティの色までわかるだろう。彼女は、男が一番見たがっているものを露にすることで、幸せそうな二人に唾を吐きかけるような快感を覚えた。

案の上、男の視線が釘付けになったが、裕美は姿勢を変えようともせず、左目をいぶかしげに閉じて浅く煙を吸った。

私では駄目なのかしらと、何度も繰り返した自問の裏側に、純樹が忘れられない女は、一体どんな魅力を持った女なのかという疑念と、強い嫉妬心がある。

サーファー男の、欲望に満ちた視線や、達彦の執拗なまでの欲望と比較して純樹の余りに無関心で素気ない態度。行きずりの男でさえ、自分に欲望の視線を向けるのに、純樹の前に素肌をさらしても見向きもしない。その差が余計に彼女のプライドを傷つける。

若い男性として当然行っている欲望処理の行為に、自分ではなくその女が中心となっていることを想像してみると、どうにも許せない嫉妬心が沸き上がってくる。

しかし冷静に考えてみると、純樹は彼女と別れて五年が経っているわけで、そんな昔の記憶を頼りに欲望処理など出来るのだろうか。ああやってクールにしているが、実は裕美の胸や脚を盗み見て、それなりに使っているのではないかと、勝手な結論を出すことで微かながら苛立ちを解消することが出来た。

裕美は、官能的な想像をしたためか、男の視線を気にしたためか、熱い脱力感を下半身に感じながら煙草を荒々しく揉み消して、すべてを忘却しようと決心した。

さっと立上ると、窓辺で甘い時間を過ごしている無関係な二人を勝手に睨みつけてから、伝票を握って去っていった。

もう彼女の決心はついていた。これ以上純樹につきまとって傷つくのはプライドが許さない。諦めるなら今のうちである。だが、一つだけ確かめておきたいことがある。万に一つの確率かも知れないが、確かめてみて損はない。今からそれを確かめにいく。裕美はアクセルを一杯に踏み込んで京都へ引き返した。

西陽が傾いてゆく。日中、熱く燃え尽くしたがために疲れ果てたように、その姿を柔らかいものにして山肌に隠れようとしている。

「ごめんなさいね、わざわざ来てもらって」

「いえ、いいんですよ。ちゃんと帰ったか心配でしたし」

「そう、ありがと」

裕美は一度部屋に戻ってから純樹の携帯に電話したが、彼はまだ戻っていなかった。彼女がシャワーを浴びてビールを飲んでくつろいでいるところへ純樹から連絡があった。

「気を悪くされたでしょう、きっと……」

純樹は電車で戻ったようだが、駅からの京都駅からの連絡後、その足で裕美の部屋を訪れた。

「何が？」
白々しい位のとぼけかたをした後、冷蔵庫から氷を取り出した。純樹は丸テーブル横の椅子に深く腰を下ろしている。彼女は取り出した氷を再び仕舞い込んでビールの缶を取り出した。
「途中で帰ったりして。でも僕は苦手なんですよ、あんな雰囲気が」
「あんな雰囲気？よくわからないわ、男心の機微てところかしら？」
裕美はハイレグになったデニムのショートパンツとピッチリとした小さめの白いTシャツを着ている。シャツが小さいために下着の模様まで判別できる。ショートパンツも小さくて、下腹部も露になり、ウエスト周りからも、パンツの裾からもパンティの一部が見えている。彼女のとる姿勢によっては、パンティの膨らんだ部分まで垣間見えてしまう。
　裕美はビール缶を二つ、丸いガラステーブルの上に置いてから純樹の横に椅子を並べ、寄り添うように座った。
　こうして再び純樹の肉体を側に感じると、さっきまでの苛々とした彼に対する憎しみが、強風で吹かれる霧のように、軽々と晴渡っていくのが不思議であった。
「頂きます。喉が乾いていたので嬉しいです」
クーラーから流れ出る冷気が、爽やかに彼女の首筋をかすめた。純樹の喉の音だけが部屋中に木霊したようで、その自分勝手な彼の喜びに立腹するようにすっと立ち上がった彼女は、窓辺に近寄って、夕暮れ真近の街の姿に視線を落とした。
「何も話題がないわね」
満足げにビールを飲んでいる純樹に背中でぴりっと問い掛けた。少しだけ昼間の腹いせをしてみたかった。
「すみません」
ビール缶を静かに置く音がした後、大柄な純樹が枯れるように萎む姿を背後に実感して、裕美はもう昼間のことは水に流すことにした。そして早速、最後に確めておきたいことを実行することにした。
「脱いでみて……」

「……」
裕美はくるりと振り返って、困惑している彼に春風のような新鮮な笑顔を送った。
「裸になって欲しいの」
いたずらな含み笑いを浮べている。
「裸に？全部ですか？」
純樹は怪訝そうに彼女を見つめる。
「上だけで結構よ」
「別に構いませんけど。変わった趣味でもあるんですか？」
軽く笑った純樹が可愛かった。
「お願い」
彼女はそう言いながら彼に近づいてシャツを脱がそうとした。
「自分で脱げますから」
純樹は少々照れ臭そうにしながらさっとシャツを脱ぎ放った。彼の筋肉の塊が露になると同時に、彼女は軽い目眩を覚えた。そうして、この奇跡としか表現のしようのない現実の傷の前に、全身の血液が逆流しそうな激しい動悸を感じた。
「その傷どうしたの？」
裕美は彼の左肩にある、随分古そうな傷跡を薬指で摩りながら声を震わせた。
「ああ、これですか。ガキの頃に近所をうろついている野良犬をいじめていたら。犬が真剣に怒ってきて噛み付かれたんですよ」
純樹は裕美の興奮を不可思議に感じながらも、いつものようにさわさわとした口調で答えた。裕美はもう立つこともできずに床に両膝をついて座り込んでしまった。
「どうしました？顔色悪いですよ、犬が嫌いなんですか？」
しばらくふさぎ込んでいた彼女が、やや赤みがかった虚ろな目つきで純樹を見つめ、
「あなた、嘘をついているでしょ！」
と、興奮のせいか、歯切れの言葉が震えている。

「嘘？」
純樹の目にも驚愕の色が浮かんだ。
「あなたは犬にいたずらしたんじゃない。あなたは野良犬に襲われた幼女を救おうとして噛まれたんじゃないの？」
純樹は蝉の抜け殻のように彼女の瞳の過去を見つめている。
「誰にも話していないですよ、誰にも……。どうしてあなたが……」
彼は独り言を口篭もりながら裕美が興奮の理由を解し得た。
「そうよ。あなたに助けてもらった幼女が私なの。確か私が六歳の頃、叔父の家に遊びにいっていて、近くの公園でひとり遊んでいた。そこへ大きな犬が近寄って来て、必死で逃げたけどすぐに追いつかれて。転んだところへあなたが助けに来てくれた。小さなあなたがその犬に飛び掛かって、何度も何度も犬に振り落とされて、それでも、わたしが遠くへ逃げるまで犬と戦ってくれた……」
純樹は天井を仰いだまま何も言えない。
「犬はあなたの肩に噛み付いて、シャツが血で真赤になったけど、それでもあなたは叫び声一つあげずに犬に抱き着いていた。やっと通りすがりの男性が追払ってくれたけど、あなたは血と泥にまみれていた。それでも、近寄った私に『大丈夫か？』て笑ってくれた。あなたはそのまま病院へ連れて行かれて、私は私で親にも言わなかったものだから、予定通り次の日に高知へ戻ってしまった」
遥か遠くの日本海で、漁船の汽笛が夜空に吸い込まれたような錯覚が二人の過去の空間で交錯した。
「私もあのことは誰にも話さなかった。とても大切な思い出だから。でも心密かに決めていたの。もしもあの人にもう一度会えたら、その人のお嫁さんになろうって……」
裕美は、どうにも説明のつかない熱い涙を滝のように流していた。
椅子にどっかりと深く腰を沈めたままの純樹は、成長した幼女の姿を目の当たりにして呆然としているが、それでも、整然と落着いた心持ちで事態を冷静に捉えようとしているように見えた。
　それとは逆に、裕美は悲しくて、寂しくて、心細くて、純樹の

胸に飛び込みそうな衝動にただじっと堪えている。
　長い長いしじまが過ぎ去り、その長さを二人は一瞬の瞬きの長さくらいにしか感じ取れない今、すっかりと陽は沈み、裕美の頬も乾いていた。
　裕美の動揺が少し鎮静した頃、彼女は夢遊病者のように床からゆっくりと立ち上がり、純樹の横に並んだ椅子に腰を沈めた。
「あなたをね、初めて見たときにね」
先程の激情から一転して、彼女は落ち着いた声で話し始めた。その声を耳にした純樹は、なぜだか顔を緊張させている。その哀れなまでの緊張感が裕美にまで伝わってきた。
「直感的に感じたの。私の王子様になってもらえそうな人だって」
その言葉を聞いた純樹の指が微かに震えている。
「どうしたの？寒い？」
「恐いんですよ」
「何が？」
裕美には純樹の唐突な変化が理解できない。
「女が腹を決めた時の恐ろしさです。自分の半径一メートルさえ幸福であれば、外の不幸せなど無関心。その不幸せの原因がたとえ自分にあろうとも微塵だに動じない。そんな人種の決心が、自分に降りかかって来たら恐ろしいのは当然です」
「女をそんな風に思っているの？」
裕美は、強いショックを受けると同時に、彼の心にも何やら大きな傷があるようで同情すら覚えた。確かに純樹の指摘するような面もある。だが、全ての女がそうではないし、ある女の全てがそうではない。だが、純樹はもう嘔吐しそうな程の嫌悪を表情に表している。
「僕には王子様になる資格なんてありませんよ、お陽様が西から昇ってもね」
京都の薄暗いマンションの一室に、世の中のすべての物を凍らせてしまいそうな冷たい言霊がずっしりと静かに舞い降りてきた。漸く

乾いていてくれた裕美の頬に再び熱い筋が流れ落ちた。
　悲しいのではない。二人の間にある隔たりが、壁が、価値観が、あまりに違いすぎて、一緒に時を過ごしていること自体が不思議でさえある。嫌われたとか、振られたとかの感覚ではなく、愛していた男が実は兄弟であったと知らされたような絶世の感覚であった。
　純樹がゆっくりと腰を上げてキッチンからタオルを持ってきた。
「涙」
そう言って優しく手渡そうとしたが、裕美はプイと立上り、ドレッサに置いてあるコットンテッシュを手にとって涙を叩いた。　純樹はシャツを着た。
「まだ信じられない気分ですね」
雰囲気を変えるように、純樹がやや明るい口調でひとり呟いた。端から返事を期待していないような彼の口調に裕美は黙って立上り、オーディオの電源をＯＮにした。
「へえ、クラシックなんて聴くんですね」
裕美は、昼間純樹のことは諦めようと決心したはずであるのに、幼女の頃からお嫁さんになろうと決めていた思い人が純樹であった、天命に近いこの偶然に出会うと、やはりすんなりと諦める気にはなれなかった。
「どうして王子様にはなれないの？」
大きすぎる隔たりをどこから埋めていけば良いのか、裕美は純樹の心の奥底にある本当の心を引き出したいと思った。
「あなたが期待しているほど、僕は強くもないし、優しくもない。いつも我儘な欲望を抑えるのに苦労している、どこにでもいるようなつまらない男だからです」
「今は王子様でなくてもいいの。普通の男で十分よ」
「普通の男にもなれないですよ。もう人を愛することが出来ない。そんな男といてもあなたは不幸になるだけです。この数週間でもうわかっているでしょう？」
そう言った純樹は、中途半端な笑顔を置いたまま立上がって彼女に

背を向けた。
「もう少し話をしたいの。お願い……」
「話をするのは良いですけど、傷つけあうのは止しましょうね」
純樹は当惑した目つきで、赤らんだ彼女の瞳を見つめたまま、再び椅子に腰を沈めた。
「彼女のお話を聞かせて欲しいの。あなたが未練がましく手紙を書き続けている、心から離れない彼女のお話を……」
裕美は甘い声を出して、涙の跡が残る瞳で彼を一心に見つめて、純樹が最も侵入して欲しくない領域にずかずかと土足で踏み込んでいった。裕美は彼を傷つける積りはないが、針を刺さないと本当の心を表してくれないように感じていた。

渦巻くとき（前書き）

何とか純樹との距離を詰めようとするが思い通りにならない裕美。そんなある日、純樹と海へ出掛けたことを知った達彦が裕美と純樹を呼び出す。裕美は、そこで達彦に別れをつげるが諦めない達彦。三角関係のもつれは意外な方向に話が進む。

渦巻くとき

「ねえ、どうやって知り合ったの？」
裕美は更に純樹の方へ椅子を寄せて身を寄せながら話し始めた。
「知り合ったのは高校一年の時です。クラスは別でしたが、僕がバレー部で、彼女はテニス部でした。バレー部とテニス部の部室が隣同士で、僕の方から声を掛けました。最初は挨拶をする程度でしたが、夏休みにデートに誘って告白しました。そうしたら彼女も快く受けてくれて、それからつき合い始めました。つき合うと言っても、電話で話すか、学校で話すのがほとんどで、滅多に遊びには行けませんでした」
「どうして？」
「うちの部は全国レベルでしたから、土日もほとんど練習や試合が入っていて、休みなんて月に一度あるかないかでしたから」
「じゃあ、その頃は一度もエッチは出来なかったのね？」
「全く……そんな段階まではほど遠かったですね」
「キスくらいはしたの？」
裕美は可愛い笑顔を浮かべて純樹を悪戯な瞳で見上げた。
「一度だけ」
彼は少し遠い目をして過去を振り返っているようだが、その表情は何となく暗かった。
「まあ、可愛らしい」
裕美は軽く笑ってから彼が肘掛に置いている大きな手を両手で包んだ。
「高校三年の夏休みまでつき合いましたけど、三年生の春休みに一度したきりですね、それもとてもぎこちなかった。その後もムードのあるシチュエーションを作ったりしたんですけどね」
「例えば？」
彼女は微笑みながら彼の高校時代を想像している。

「夕暮れ時に川の堤を散歩したり、夏祭りで人気の少ない所で話したり……。でも、とにかく二人きりで会える時間が少な過ぎました」
「一度くらいエッチしたかった？」
「そりゃあ、当然興味ありましたよ。でも、毎日学校で会って話しを出来るだけでも結構幸せでしたよ」
「へえ、純情な交際だったのね。でも、眠る前には彼女のことをいろいろ想像して自分で慰めていたんでしょ？」
裕美のストレートな質問に一瞬驚いた様子を見せたが、純樹はすぐにいつもの口調に戻って、
「ええ、健康な男としては当然。随分想像しましたよ。でも、彼女だけじゃなくてグラビアアイドルとかクラスのちょっと可愛い人とか」
「あら、案外浮気性なのね」
そう言って裕美は両手で包んだ彼の手を自分の膝に乗せた。
「女性は浮気しないんですか？」
軽く微笑んだ純樹は返答など期待していない様子だ。
「グラビアアイドルはないわね。でも好きな男優はありかな」
彼女も軽く笑って純樹の反応を確認した。彼は少々驚いた風で頬を少し赤らめている。
「どうしたの？エッチなこと想像したでしょう」
からかい気味に彼の瞳を覗いてから、
「高校を卒業してからは会っていないの？」
と、少し締まった表情に戻って尋ねた。ここで嘘は許さない。そんな心持で彼の仕草のすべてを注意深く観察した。
「去年の正月、実家に帰省しているときに街で偶然出会いました。卒業してからほぼ三年ぶりでした。その時は軽く食事をしただけなんですけど、その後も何度か会って、京都へも一度、彼女が遊びに来たこともあります」
裕美は一瞬、彼の部屋に女性用の衣類があったことを思い出して、それが彼女と関係がありそうな疑惑を抱いた。

「あなたの部屋に泊まりにきたの？」
「いえいえ、彼女はホテルに泊まりましたよ」
純樹はあっさりと答えたが、彼女はまだ信用しきっていない。
「そう。じゃあ、やっぱり高校時代からの思いは果てられなかったわけね？劇的な再会だったのに……」
裕美は、純樹のやや動揺を帯びた瞳を覗き込んで薄く笑った。
「別にそれだけが目的じゃないので、それほど落胆はしていませんよ。いろいろ話ができたし、観光地も訪れて楽しかった。でも事実はあなたの言う通りです」
彼の瞳の動揺は収まっている。
「それからも会っているの？」
「いえ。京都に来たのが最後で、その後は会ってもらえません」
裕美は心の底に安堵の気持ちが広がるのを感じた。
「彼女はきっと昔が懐かしかっただけなのよ。或いは、もう一度あなたとやり直せるか試してみたのかな？でも、やはりあなたは昔と変わっていなかった。だから再び嫌われてしまった」
裕美は、すこし刺激が強過ぎるかと一抹の不安を感じながらも、思い切って最悪のシナリオを話してみた。
「きっとそうでしょう。僕はつまらない男ですから」
純樹は、思いの他爽やかな笑顔を浮べて他人事のような顔をしている。
「そんなに素敵な女性なの？自分に魅力を感じていないとわかっていても手紙を書き続けるなんて……。未練たらしいと思わない？」
しばしの間、爽やかな沈黙が流れた。クラシック音楽はいつの間にか終わっている。
　少なくとも裕美にとっては爽やかな沈黙であった。　純樹と出会ってからのフラストレーションを、すべてぶつけ返したような報復の気分と、早く惨めな行動はやめて前向きに生きて欲しいという願いが混在している。
　一方の純樹は、小さな汗をかいたビール缶のラベルを見るとも

なく見つめながら、
「未練か……。こういうのを未練て言うんでしょうね。でも僕は手紙を書きたいから書くだけなんです。今でも彼女のことが忘れられないから。好きだから」
と、やや暗い声質で胸中を明かした。
「別にあなたがどうしようと勝手だけど、あなたのしていることは時間と労力の無駄よ。徒労。だってあなたの手紙を彼女が読んでいると思う？私が彼女の立場なら、そのままゴミ箱に捨てるわ」
裕美は彼の反応を伺ったが、じっと缶を見つめたまま動かない。その愚鈍な反応にすこしイラついた裕美は、
「失礼だけど……。はっきり言うと、彼女はとても不快に感じていると思う。労力をかけて思いを筆に託し、その費やしたエネルギー分だけ彼女に嫌われていく。徒労以外の何ものでもないわ」
裕美は、彼には辛い言葉だと思うが、女の身勝手な本性を知らない初な男に、このまま惨めな行為を続けて欲しくなかった。
　純樹はゆっくりと目を閉じて背もたれに身体を預けた。裕美もやや目を伏せがちにして彼の手の甲をゆっくり摩った。
「鴨川でも桂川でも良いですけど、川の流れに逆らって泳いでいる人を見てどう思いますか？馬鹿な人だと思いますか？」
「ええ。それに疲れるでしょうね」
溜息混じりに彼女が答える。
「世の中にはいろんな流れがあります。文化の流れ、社会の流れ、ビジネスの流れ……。人は皆、流れに遅れまいと必死に流行を追っている。ビジネスの流れを読み間違えた企業はあっという間に衰退していく。社会の流行に乗り遅れた若者は、周囲に馬鹿にされたりする。そんな状況の中で、じっと一箇所に立ち止まるなんて愚かなことかもしれません。まして逆行するなんて……。それでも、世の中に一人くらいそんな人間がいても良いんじゃないでしょうか。否、一人に一つくらい、そんな頑固なこだわりがあっても良いんじゃないでしょうか」

裕美は彼の言葉が胸に刺さって身動き出来ないでいる。
「自分の愛欲や性欲を満たしている瞬間だけが幸福なんでしょうか？好きでなくなった人と惰性のデートをしているのが幸福なのでしょうか？本当は愛なんて薄まっているのに、離れるのが寂しいから、孤独になるのが恐いから、もたれ合っている関係が幸福なのでしょうか？夫婦がいて、子供がいて。誰が言い出したか知らないけれど、家族が一番大切だ、すべてを犠牲にして家族のために尽すことがすばらしい生き方だなんて価値観を、疑うこともなしに生きて幸福ですか？自分の夢を削りながら家族のために尽くす。そのうち、家族のためにという錦の御旗を掲げて努力しなくなる。自分の夢を追いかける努力を忘れて家族のせいにする。そして自分の人生を程々の努力で過ごしておいて、家族のために働いたなどと自分を誤魔化して死んでいく。俺にも若い頃には夢があったなんて空々しい言葉をうそぶいて、怠慢の蓄積した肥満腹を撫でながら、自分がしてこなかった努力を子供に押し付ける……。そんな人生が幸福でしょうか？」
裕美は呼吸をすることすら忘れていた。純樹が一呼吸置いた時に、思い出したように大きく息を吸った。
「彼女には大変申し訳ないけど、もう少しだけ僕の恋人でいてもらいます。後わずかな間だと思います。でも、今は彼女が好きなんです。好きな人に思いを伝える努力をしていたいんです。未練だとか惨めだとか、情けないとか、今は世間の価値観にとらわれたくないんです。彼女が本当に好きだから電話はしません。相手が逃げにくい状況は作りません。だから手紙だけを書き続けます」
裕美はもう一度深く息を吸ってから、
「本当に好きなら、やっぱりあなたの疎ましい手紙も止めるべきだわ。どんな理屈で自分を正当化してみても、結局あなたは彼女に甘えているだけだわ。好きな彼女を苦しめている事実は全く動かない。彼女はあなたのことが嫌いなのよ、わかる？」
と、冷たい言葉を吐いた。そして言葉を吐きながら涙しそうであっ

た。自分に対する嫌悪で嘔吐しそうであった。
　裕美は、両親のために橘昭と結婚することを考えながらも、京都にいる間に素敵な王子様が現れないかと期待している。さりとて、自分のプライドを傷つけてまで男を求める気もない。
　正しいかどうかは別としても、純樹のような自分なりの価値観や判断力や頑固さもない。そのくせプライドだけが高く、こうして純樹の心根に同意する部分はあっても、自分が彼より劣っていることが許せないのか、自分が彼女に勝てないことが許せないのか、彼が素直に手紙をやめると言わないことが許せないのか、とにかく純樹を攻撃してしまう自分が嫌だった。いっそのこと、このまま純樹が激怒して自分を殴りつけでもしてくれたら、少しは心の置き所ができるような気がした。しかし、その考え自体が他人頼みである。
猛裕美は心の中が整理できなくなってきた。
「まあ、そのうち泳ぎ疲れますから。力尽きて、結局は川の流れに押し流されてしまうんですよ」
そんな裕美の心情を察したのか、純樹が明るい雰囲気で話題を冗談に切替えた。
「どこへ流されるの？」
裕美も語気を明るくして尋ねる。
「彼女を愛する気持ちを忘れてしまうんでしょうね」
彼女は純樹の透明な表情を見つめながら、
「さっさと次の女を捜して乗り移ればいいのに……」
と、話の流れから考えると全く無意味な言葉を冗談ぽく告げた。
「僕は不器用ですから、下手に舟を乗り換えようとすると川に落ちてしまいますよ。結果的にはどちらにも乗れずに舟だけが先に行ってしまう。おまけに方向音痴ですから、追いかけようとすると、川を上がったり下ったり、大変です」
純樹はちょっぴり顔を赤らめながらビールを飲み干した。一度席を立った裕美は、彼女の前で初めて饒舌になった彼のために新しいビールを手渡した。

話の内容は決して自分に嬉しくないものだったが、彼がこんなに自分の考えを話してくれたのは初めてである。酒場での馬鹿話しはうんざりするほど聞いてはいるが、こんな真面目な話しをしてくれるとは思ってもみなかった。
「それじゃあ待っていようかな。あなたが流れてくるのを……」
再び席に戻った彼女は、純樹が握り潰した空缶の折れ目を指でいじりながら、美しいくらいに臆病な声で呟いた。
「え？」
新しいビール缶を左手に持ったままの純樹は、ぽかりと口を開いたままで裕美の横顔を見つめた。
「あなたが泳ぎ疲れて、流れてくるのを待っていたいの」
今度は彼が臆病な表情を浮べて、微妙に震える手で静かにテーブルへ缶を戻した。不思議な事に、彼女はその様子を見ると、一瞬緊張した気持ちが落ち着いてきた。
「ありがとう。でも、その前に多分沈んでしまうと思いますよ。とにかく不器用で方向音痴ですから」
純樹はそう言ってにっこり笑い、ビールの缶を開けた。裕美はその白い笑顔にどきりとした。
「人間は溺れて沈んでも、やがては浮かび上がってくるそうよ。そしてあなたは流れてくる」
裕美の笑顔になぜか一瞬暗い表情を浮かべた純樹は、思い切り作り笑顔を浮かべて、
「魂の抜けてしまった僕で良かったら、どうか線香の一本もあげてくださいな」
と、白い歯を見せて笑った。裕美は頭を彼の肩に乗せ、ビール缶をつかんでいる左手を再び両手で包んで自分の腿にあてがった。そしてゆっくりと闇に浸かっていく街並みを二人でぼんやりと見つめた。
今日も熱く燃え盛った夏の陽が沈みきり、街の灯がぽつりぽつりと灯り始めている。

裕美は今日一日の出来事を振り返ると再び心の動揺が始まり、何とも切なく悲しい思いと、目の前にあるものが手に入らないもどかしさとで、この夕闇の景色は一生涯忘れないのではないかと思った。
万に一つの奇跡に出会い、ずっと心の隅に秘めていた思いを打ち明けたものの、王子様は実は宇宙人だったような、どうしようもない隔たりを以って拒絶されてしまった。
それでも純樹は今、自分の隣にいる。自分の手の中にある彼の手は、温かくて、大きくて、自分を幸福に導いてくれそうな血の通った手である。
裕美は彼の手を両手で強く握り締めた後、突然立上って強引に純樹の唇を奪った。薄暗い部屋の中で、裕美は純樹のぶ厚い胸に抱きつき、熱く唇を重ねた。
「お願い、抱いて……」
裕美は彼の耳元で、今にも泣き出しそうな声で小さくささやいた。

裕美が純樹と海へ出掛けた日から数日経った後、裕美は達彦から呼び出しを受けた。重要な用件があるらしい。裕美も今夜は覚悟を決めていた。どんな泥試合を演じても、彼とは別れようと決心していた。
約束通り、夕暮れ時に上賀茂神社の鳥居下に向かった。背の高い男性が二人、彼女に気づいた。裕美は一瞬たじろいだが、今更帰るわけにもいかず、そのままゆっくり歩を進めた。裕美は水色のTシャツとやや濃い水色のホットパンツに半袖デニムシャツを着ていた。はっきり言って、達彦に会うために着る物には気を遣わなかった。しかし純樹がいるのならこのコーディネイトは不満だった。
裕美はもう一度自分のシャツとパンツを見下ろして溜息を吐きながら、純樹の瞳に視線を向けた。彼もやや驚ろいた表情で達彦に何か言っている。どうやら達彦の企てで二人は呼び出されたようだ。
「こんばんは」
裕美はどちらに挨拶するともなく声を掛けてから、冷たく達彦の表

情を盗み見た。彼はにこりと笑っているが、純樹は無表情のまま境内の方を眺めている。
「純樹さんも来てらしたのね」
裕美は白々しいと思いつつも明るい声を掛けた。
「ええ」
だが、純樹はいつもの素気ない態度で彼女を迎えた。まるで、この前のことなど何も無かったかのような態度である。海に行こうとしてケンカしたことも、過去の起きた二人の絆のことも、そしてあの日、裕美が強引に身体の関係を迫って拒まれたことも……。
一体どういうつもりで達彦は純樹を呼んだのだろうか。別れたくないから仲裁でもしてもらう積りなのか。裕美は純樹のことよりも今は達彦の企みが気になった。
三人は、行きつけの居酒屋に歩いて向かった。店に入ってすぐ、男二人が向かい合って座ってしまったので、裕美はテーブル席のどちらに座るか一瞬迷った。だが、純樹が奥に詰めないので仕方なく達彦の横に座った。
二、三言会話を交わしただけで、純樹は生ビールを飲み始め、達彦は酎ハイをぐいぐいと勢い良く流し込んだ。二人の男は黙ったまま、それぞれ二杯づつを飲み干して三杯目を頼んだ。その間会話はない。だが、険悪な空気ではなく、むしろ自然でさえあった。高校時代からずっと先輩後輩の仲でつき合っているためか、無言で会話しているような親密感が漂っている。裕美はひとりで仲間外れにされているような感覚を覚えて、純樹とこんな雰囲気でいられる達彦が羨ましくさえあった。
裕美は無言のまま、水割りに浮べたレモンスライスを手持ち無沙汰にステアでいじって遊んでいる。しばらく沈黙の呑み会が続いたが、堪え切れなくなった裕美が少し苛々した調子で口火を切った。
「達彦さん、いったい、何のお話かしら？先輩の純樹さんまでお呼びして」
裕美は仲間はずれにされている孤独感が嫌で、さっさと達彦に別れ

を告げて帰りたくなった。
「この前、二人で海へ行っただろう」
裕美ははっと驚いて純樹を見つめたが、彼は小さく首を振った。二人とも達彦に話してはいないのに、なぜか彼は知っている。だが、知られたところで別に構わない。
「ええ、それがどうしたの？」
裕美は挑発的な態度で達彦の瞳をにらみつけた。
「はっきり言って気に入らない」
達彦は二人の表情を交互に見ながら呟いた。
「黙っていたことは謝る。すまない。でも、結局海までたどり着けなかった。途中でケンカしてな……」
純樹は笑みを浮べながら明るく話して、熱くなっている達彦を落ち着かせようとした。だが、裕美は純樹の努力など気にせず、
「仮に海までたどり着いていたとしても、仮にホテルで泊まってきたとしても、あなたには関係ないわ」
と、強い口調で言い放ってから、冷たい軽蔑の視線を、水割りの氷から達彦の瞳に流した。
「お前は俺の恋人だぞ」
達彦も口調が強くなる。
「いつまでそんなこと言っているの？この前話したでしょ、もう私はあなたのことが嫌いなの」
冷たい彼女の声が達彦の胸を刺す。
「君こそ、いつまでそんな戯言言っているんだ！すべてを許し合った仲じゃないか、そんなに簡単に別れられるか！」
「何も許していないわよ！あなたには何も！」
裕美は、氷が鼻に当たるほど勢いよく水割りをあおった。
「俺は君のすべてを知っているさ。それとも、もう本宮さんにも抱かれたのか？」
裕美は怒りで指先が震え始めた。
「あなたは、私の身体のことしか頭にないの？馬鹿じゃない！」

悪態を吐いた彼女は、水割りの氷に視線を落として大きく呼吸をした。だが、達彦は彼女の様子など構わずに、
「どうなんですか？本宮さん」
と、純樹にも無愛想な声をぶつけた。
「神に誓うよ。俺は裕美さんとは、お前が疑うような仲じゃない」
純樹は笑みを浮かべて達彦を諭すような語気で誓ってから、三杯目の生ビールに口をつけた。
「静江さんに相手にされなくて、寂しくなって、裕美に興味をもったんじゃないですか？」
裕美はどきっとして純樹の瞳を見つめた。彼が手紙を書き続けている彼女は静江という名前なのだろう。
「いい加減にしてくれよ」
純樹は苦笑いを浮かべて枝豆を口に運んだ。
「俺も男だからわかりますよ。いくら好きな女がいても、ずっと女にご無沙汰していたら、他の女が欲しくなることもある」
裕美はふっと笑いが込上げてきた。達彦はきっと他の女にもちょっかいを出していると感じた。嫉妬に狂って自分で墓穴を掘っている達彦が滑稽に見えて可笑しかった。
「俺は興味ないよ、裕美さんの心にも身体にも。そしてお前らの恋愛関係にも……」
枝豆の皮を捨てた純樹が、少し怒気を含んだ声で達彦に告げた。もう、これ以上は疑うなと言った、暗黙の言葉を語っているように思える。裕美はそう感じて、達彦も話題を変えるだろうと予期したが、純樹に念を押すように断言された拒絶の言葉に胸が凍る思いをした。
「それじゃ、なんで他人の女を誘ったりするんですか？」
達彦はまだ納得がいかないようだ。
「誰があなたの女よ！」
裕美は、純樹に冷たい言葉を吐かれた怒りを達彦にぶつけるが、男たちの耳には届かない。
「お礼をしただけだよ。俺なんかのために、雨の中に突っ立ってノ

ートを届けてくれたから。それが気に入らないのなら謝るよ、すまん。だが、繰り返すがそれだけだ。他意はない」
達彦は純樹の瞳をしばらく見つめていたが、純樹の真摯な態度にようやく納得したようだった。
「わかりました、信用します。失礼なことを言ってすみませんでした」
達彦は少し頭を下げた。裕美はそんな様子を見て、男の単純さに驚くと共にため息が出た。自分にはこんな人間関係は存在しない。
「私もここでもう一度断言させて頂きます。私はあなたが嫌いです。今まで出会った男の中であなたは最低です。大嫌いです。二度と私の前に現れないで下さい」
先ほどからの孤独感も手伝ってか、裕美は心底沸き上がる怒りを言葉にした。震える声を制しながら最後まで言い遂げた時、達彦が酎ハイのグラスを叩きつけるように置いてから、
「もう一度言ってみろ！」
と大声で叫んだ。店内が、一瞬水を打ったように静まりかえった。
純樹が手を伸ばして達彦の肩を軽く叩く。
「すみません」
達彦はそう言って深呼吸をしてから酎ハイを流し込んだ。
「もう少しゆっくり話したらどうだ？今夜は酒も入っている。日を改めて、酒の無い席で話し合えよ」
純樹が微笑みながら、二人を落ち着かせようとしている。
「あなたには関係ないでしょう！」
裕美は、今夜別れようと決心していたから、純樹の言葉にも腹が立ってしまった。
「そうか……。関係ないなら帰るぞ。二人でゆっくり話し合えよ」
純樹は二人に向かって静かに告げてから立上ろうとした。
「待って！」
裕美が先に立上って純樹の両肩を押さえた。
「行かないで。私はあなたが好きなの。あなたが他の女を好きでも

構わない！あなたが疲れて流れてくるのを待っていたいの！」
達彦の怒りと嫉妬が横から伝わって来る。しかし裕美は必死だった。男の前でこんなに惨めな醜態をさらすのは初めてだった。純樹にここから連れ出して欲しい思いで一杯だった。少なくとも、達彦と別れるところを見て欲しかった。
「お願い、待って……」
裕美は瞳に涙を浮かべている。純樹は両肩に乗った彼女の手を押し戻してから、椅子に座るよう目で促した。
「待って欲しいなら、達彦のことも待ってやれよ。何で嫌いになったのか、ちゃんと説明してやれよ。達彦はあなたのことを愛してなんかいない。ひとりになるのが寂しいだけだ。それを愛だと誤解している。勘違いしている。だからちゃんと時間を掛けて、本人が現実を受け入れるまでつき合ってやれよ」
後頭部を打たれたようなショックが、大きな波となって裕美の全身を駆け巡った。純樹の放った言葉の一つ一つが、心の中で何度も木霊している。
「どうして本宮さんにそんなことがわかるんですか。どうしてそんなことが言えるんですか。俺は裕美のことを愛している。あなたが勝手な想像で俺の気持ちを語るなら、俺もあなたの気持ちを勝手に語りますよ」
裕美は放心状態のまま達彦の言動を見つめた。彼女の知らない、純樹の過去のことがわかるような期待を持って二人会話を見つめた。純樹も黙って達彦を見つめている。
「本宮さんこそ静江さんのことを愛してなんかいない。責任を感じているだけじゃないですか。罪滅ぼしのために彼女を好きになっている。いや、そう思い込んでいるだけで、本当はとっくに醒めている。静江さんは、そのことをわかっているから本宮さんに会おうとしないんですよ。それなのに、いつまでも手紙を書き続けている。もう、自分を責めるのは止めたらどうですか？あれは事故だったんですよ、本宮さんに責任はありません」

達彦がテーブルに両肘を着いて、やや身を乗り出して話し始めた。
「事故？いったい何があったの？」
裕美が二人の男を交互に見つめて説明を促す。純樹が達彦を見て微かに頷いた。
「本宮さんと静江さんが、三年生の夏休みに旅行へ出掛けた。そこで川下りの観光舟に乗っていたところ、前日の雨で増水していたために流れの変化が激しく、舟が岩にぶつかって転覆した。大勢の怪我人が出て、死亡者も出た事故だ。静江さんはその事故で片足が動かない身体になった。また、頬にも一生消えない深い傷跡が残り、精神的にも不安定で、時々錯乱状態になったりするそうだ」
裕美は、先日純樹と語った折に、彼が川を流される話を例え話にしていたことを思い出して、事故のことが彼の心に深く残っていることを悟った。そうとも知らずに、沈むだの流れてくるだのと不謹慎な言葉を並べてしまったことにやや罪悪感を覚えた。
「本宮さんは、彼女の怪我を自分の責任だと思っている。自分が川下りに誘ったからだと思っている。自分が守れなかったからだと考えている。高校時代から、もう何度も言っていますけど、あれは不運な事故だったんです」
達彦が静かに純樹を見つめている。裕美も純樹の瞳をじっと見つめて彼の言葉を待った。
「俺は静江のことを本当に愛している。遠くにいても、会えなくても、愛する気持ちは変わらない。決して責任感で好きになろうとしているわけじゃない」
純樹は達彦とは逆に、椅子に背中を預けて肩の力を抜いた。
「俺が否定しても、本宮さんは静江さんを愛していると言う。だから俺も、誰に何と言われようと、裕美を愛している」
「あなたが愛しているのは私の身体だけよ。純樹さんが言うとおり、あなたはひとりになるのが寂しいだけよ。いいえ、私もそうだったのかも知れない。ひとりになるのが寂しくて、好きでもないあなたとずるずるつき合っていたのかも知れないわ」

裕美が達彦をにらみつけたまま、冷たい言葉を挟んだ。しかし、二人の男は聞く耳を持たない風に黙りこくっている。無視されて苛々し始めた裕美の回すグラスから、氷の音が響いた。

「蹴ったんだよ……」

氷の音が止まった。若者たちで賑やかな店内の、ここの空間だけが不気味な静けさに包まれた。達彦も裕美も固まったように純樹を見つめている。純樹が身を乗り出して口を開いた。

「舟が転覆して、俺は激しい川の流れに巻き込まれて、息もろくに出来ない中、身体はあちこちの岩にぶつかり、痛みと苦しさと水の冷たさで気が遠くなっていた。その時、偶然、目の前を流れる流木をつかむことが出来て、何とか水面に身体が出ようとした瞬間、俺の脚に誰かがしがみついた。俺は直感的にそれが静江だとわかった。だが、再び彼女の重みで水中に引き戻された俺は、脚にしがみつく静江を蹴ってしまった。彼女の手が離れるまで何度も何度も蹴った。彼女の手が離れて軽くなった俺は、流木につかまって水面に顔を出すことが出来た。その時、苦しそうにもがきながら流されていく静江の姿が目に映った……」

重苦しい沈黙がしばらく続いた。裕美も達彦も、純樹に掛ける言葉が見つからない。純樹はずっと苦しんでいたのだろう。高校三年生の多感な時にそんな体験をした彼は、きっと自分の犯した罪にひとりで苦しんでいたのだろう。作り笑顔の裏側で、いつも罪の意識があった。人生を楽しめば楽しむほど、その罪の意識が高くなっていたのではないだろうか。裕美は、じっと手元を見つめている純樹の心情をそんな風に想像してみた。

「だからと言って、責任感や罪の意識が基になって静江を愛しているんじゃない。静江も俺のことを愛している。だが、二人とも苦しんでいる」

「静江さんが苦しんでいる？」

達彦が不思議そうな表情で純樹を見つめる。

「事故の後、俺たちは話し合う機会がなかった。謝る機会もなかっ

た。手紙は書いていたけど、事故のことには触れていなかった。それが去年の夏、偶然街で出会ってから、少しの間心を開くことが出来た。静江が京都に遊びに来た日の夜、俺は事故の話を切出して、俺が静江と知りながら、自分が助かるために彼女を蹴ってしまったことを話して謝った」

純樹はそこまで話すとビールを口に運んだ。ゴクリという喉の鳴る音が大きく響いた。裕美と達彦はじっと純樹の言葉を待っている。

「静江も本当のことを話してくれた。彼女もあの時、俺だと知って脚に抱きついたらしい。自分が苦しくて死にそうだと感じた時、ひとりで死ぬのは嫌だと直感した。俺と一緒に死のうとした。静江は生きたくて俺の脚にしがみついたんじゃない。一緒に死のうとしたんだ……」

裕美はもう聞いていられなかった。純樹の言葉通りにイメージを膨らませて、頭の中で事故の場面を忠実に再現すればするほど心が苦しくなる。自分がその状況に置かれたら、どう行動していたのか、想像することさえ拒絶してしまった。

「二人とも真実を告白して、相手に謝罪したことで少しは気が楽になった。そしてお互いに相手のことは許しあった。だが、俺はやはり自分を許せない。自分が生きるために愛している人を蹴落とした自分が……」

そこまで話した純樹は大きく呼吸をしてから一口ビールを飲んだ。

裕美は、何とはなしに不愉快な心の塊が、腹の底で蠢き始めるのを感じた。何かが違う。何かがおかしい。裕美は静江に会ったことは無いが、静江が美しい女のように思えてきて、いや、純樹や達彦そう思い込んでいるような気がして、それが許せなくなってきた。

「静江さんはきっと、あなたのことを許してなんかいないわよ」

冷厳な裕美の言葉が、ナイフのように男たちの胸を刺した。達彦が驚いて裕美の顔を茫然と見つめる。純樹は反応しない。

「あなたは、結果的には健康で、大学にもいって、一生懸命好きなバレーをやっている。だから静江さんのことを許せるのよ。でも、

彼女はもう元の生活は出来ない。一生、不自由になった脚で生活していかなければならない。純樹さんのことを許したいのに、どこかで許せない自分がいる。彼女は愛する人に裏切られた苦しみと、愛する人を許せない自分に苦しんでいるのだと思う」
純樹がゆっくりと、大きく頷いた。
「そのとおりだ。俺もそう考えている。だから二人とも苦しんでいると言った。お互いに相手のことを愛すれば愛するほど、自分が許せなくて、愛する資格がないと悟って苦しんでいる」
そう言った純樹に見つめられて、裕美はどきりとした。苦しい言葉の吐露とは裏腹に、彼の瞳は澄んで輝いている。静江との愛を語っている彼は、どんなに苦しくても輝いている。そう感じた裕美は急激に憎悪の念が湧いてきた。
「だったらもう彼女を解放してあげなさいよ。あなたが彼女に関わっていると、彼女はいつまで経ってもその苦しみから逃れられないのよ」
裕美は、純樹がショックを受けて落胆することを予想していたが、
「俺もそのことはいつも考えている。いつも悩んでいる。でも、俺が離れたとして彼女は本当に救われるのだろうか……」
と、冷静な表情で裕美を見つめ返してきた。やはり、悲しいくらい綺麗な瞳をしている。
「少なくとも、あなたのことを許そうとして苦しむ必要はないわ。あなたのことを、心から憎んで、恨んで、大嫌いになって生きていく方がよほど楽だわ」
裕美は純樹を苦しめる言葉を吐きながら、なぜだか涙しそうになった。だが、今度は達彦が裕美を冷たく見下ろして、
「お前みたいな人間はそうかも知れない。いや、静江さんもある期間はそうしていたのかみ知れない。でも、それでは何も解決しないことがわかったんだよ、きっと」
と、やや高揚した口調で思いを吐いた。
「あなたみたいな幼稚な男に何がわかるのよ。単に静江さんに憧れ

ているだけでしょう」
裕美はもう自分が嫌になってきた。結局は静江に嫉妬しているのだ。
「本宮さんは、静江さんと偶然街で会ったと言ったけど、あれは、静江さんに頼まれて俺が仕組んだからさ。静江さんと深く話したわけじゃないけど、ちゃんと事故と向き合いたいから、本宮さんに会ったんじゃないですか？」
達彦はもう裕美の存在を忘れたように純樹に話し掛けた。純樹は微かに頷いたが、しばらく黙り込んでいる。三人は何も語らず、少々熱くなった心を冷ませていった。
　やがて純樹が残ったビールをゆっくりと飲み干した。そしてにこりと微笑んでから、
「何か変な話題になってしまったな。俺の話はここまでだ。これからのことは俺自身で決める。今、お前たちが俺のことを色々考えてくれたように、お前たちももう少しお互いの気持ちを考えてやれよ。もう少しだけ時間を掛けて、別れるなり続けるなり好きにしろ」
そう言って静かに席を立った。もう、裕美は純樹を追う気持ちにはならなかった。だからと言ってこのまま達彦と話し合う気にもなれない。ただ、ぼんやりとして酒を流し込みながら、どうにもならない純樹との隔たりに、魂の力まで抜けてしまっていた。

流れ去るとき（前書き）

クリスマスイヴに裕美は強行手段にでてとうとう純樹と関係を持つ。だが、結局二人が流れ着く先は、自分を愛することが出来ない男女の悲しい結末であった。

流れ去るとき

クリスマスイヴ。裕美は部屋で料理を作った。子供の頃から母親に家事を教え込まれているので料理は得意だ。ローストビーフやグラタンなどワインに合う料理を用意した。

純樹と達彦との三人で話したあの夜から三ヶ月以上が過ぎていた。あの後、達彦とは二ヶ月ほど別れ話をしながら付き合った。達彦も最初は諦めなかったが、純樹の言ったとおり、時間を掛けて現実を冷静に説明し続けると、さすがに達彦も醒めてきたようで、漸く別れに応じてくれた。達彦が諦めてくれるまでの間、裕美は純樹に何かと接近していたが、やはり彼は素気なかった。達彦と別れてからは、食事や買物などに気軽に付き合ってはくれるが、心の距離は一向に縮まらなかった。

今夜はイヴなので、お互い、ひとりで食事するのも侘しいだろうと言う理由をつけて裕美が誘った。特に用事も無かった純樹はあっさりと了解して、ワインを片手に訪れてきた。

自分へのプレゼントなど期待していなかった裕美だが、やはりワインだけでは少し寂しい気持ちがして、自分が用意していた純樹へのネクタイのプレゼントは渡せなかった。

「たくさん食べてね」

裕美が言うまでもなく、彼は体育会系の食欲を露にしている。ワインも既に二本が空になっていた。

「静江さんにはいつもどんな手紙を書いているの？」

裕美は少し酔った勢いで、普段は聞き及べない立入ったことを聞いてみた。

「大したことは書いていませんよ。日々の出来事をかいつまんで書いています」

ワイングラスを手にしたまま、彼は軽やかな語り口で話してくれた。

「週に何通くらい書くの？」

「そうですねえ。だいたい週に一通のペースかな」
純樹も酔い心地のような軽い口調だ。
「毎週なんて大変じゃない？」
「日記みたいなものです。もう習慣になりました」
「相変わらず返事は来ないの？」
裕美は遠慮がちに確認してみた。純樹はにこりと笑いながら頷いた。

裕美はもう、止めろと言う積りはない。気の済むまで書けば良いと思った。純樹の心にいる静江にはどうあがいても勝ちようが無い。静江は純樹の中で理想化されて、偶像化されてしまっている。そんな静江を彼は愛していると思い込んでいる。裕美からすると、それはもう恋愛ではなく、ある意味宗教に近い状態か、単なるマスターベーションである。裕美はそんな風に考えることにした。
「そう。寂しいわね。でも、そうやって愛せる人がいるだけあなたは幸福だわ」
裕美はチーズを摘まみながら純樹の気持ちに寄り添った。
「裕美さんならすぐに見つかりますよ。綺麗だしセクシーだし」
裕美は、心の中で溜息をついた。この男はいったいずる賢いのか、単純なだけなのか……。裕美は散々、彼に恋愛感情をぶつけ続けてきたのに、それを全く感じていないのか、感じない振りをしているのか……。だが、イヴの今夜はそんな小難しいことを考えるのは止めにした。
「ありがとう。あなたに褒めてもらうなんて嬉しいわ。セクシーだと思ってくれるの？」
ちょっと甘い息を漏らして見上げた裕美の瞳に、照れるように彼はワインを煽った。
「一度くらい、おかずにしてくれた？」
悪戯な笑みを浮かべて純樹の瞳を覗きこむ。
「もう、勘弁して下さい。それより料理が上手ですね、どれもみんな美味しい。居酒屋で食べているみたいだ」

純樹が幸福そうな笑顔を浮かべて裕美の心を熱くした。
「ありがとう。でも居酒屋なのね……」
彼女は冗談交じりに純樹をいじめる。
「居酒屋かファミレスしか行ったことがないので……。すみません」
そう言って愚直に謝る純樹を見ていると、やはりずる賢さは感じられなかった。単純なのだ。静江以外の女の愛情を受けてはいけないと本能的に拒否している。いや、拒否をする習慣が身についてしまっている。そんな気がしてきた。
「全国ではどこのバレーチームが強いの？」
裕美は純樹にワインを注ぎながら、自分には全く興味の無い話題に導いてみた。すると、純樹の舌が急に饒舌になり、彼女には全くわからない戦術やテクニックの話まで熱く語り始めた。
チームの飲み会に参加すると、最後はいつもこういう話になる。それまでエロ話で盛り上がっていた男たちが、急に真面目になって熱く語り始めるのだ。時には口論になったりする。裕美は、そんな時にはさっさと席を離れて他の女たちの輪に加わるのだが、時々、単純で暑苦しい男どもの馬鹿さ加減が羨ましくなったりもする。
『どうしてあそこまで熱くなれるのかしら？』
裕美は女たちとそんな会話をしていたことを思い出しながら、今、酒を飲むのも忘れるくらい熱弁を振るっている純樹の瞳を見つめたまま、どうにかして、この純情な男に現実の恋愛を教えてあげたいと思った。心の中に築いた理想像を思い浮かべてマスターベーションをしている彼に、血が通い、魂の宿る肉隗と対話し、愛欲を満たしあう悦びを教えてあげたいと思った。
純樹の饒舌が時々空回して眠気を催し始めた頃、裕美は水を飲ませてからベッドで仮眠するように勧めた。彼は遠慮していたが、睡魔には勝てずに彼女のベッドに横たわった。裕美は手早く後片付けをしてから部屋の灯りを消した。そして純樹の横に添え寝をしてから彼の寝息を確かめた。よく眠っている。

裕美は掛け布団を横に除けてから純樹のジーンズを開いて、再び彼の横に寝そべった。そして彼の横顔を見つめながら彼の股間に手を伸ばした。しばらく裕美の小さな手で愛撫していると純樹が目を覚ました。

「いいの。じっとしていて！」

裕美が強い口調で、状況を把握し切れていない彼に言いつけた。ゆっくりと周囲を見渡しながら、眠気眼で裕美を見つめた彼は、一瞬正気に戻ったようだ。

「お願い。じっとしていて。私はあなたの役に立ちたいの。私は何もいらない。あなたに何も求めない。だからじっとしていて」

裕美は純樹の耳元でそうささやいてから、彼の下半身に顔を移した。そして彼の下着をずらせてから彼をくわえ込んだ。純樹は混沌とした様子で、ただ彼女の成すがままになっている。ほんの僅かな愛撫で、彼の性欲の塊が裕美の口に広がった。

裕美は再び純樹の耳元に戻った。彼は大きく息をしながら、突然起きた快感の波に戸惑っているようだ。

「私はあなたの味方よ。あなたが静江さんと上手くいくことを願っているの。私はただの友達よ。あなたの恋人になろうなんてもう思っていないわ」

そう言って、まだ放心状態の純樹の手を握って、彼女のトレーナシャツの中に彼の手を導いた。下着は先ほど外している。

「風俗店に遊びに来ていると思っていいのよ。静江さんも遊びなら許してくれるはずよ。離れて暮らしている若い男が、マスターベーションだけで我慢しているなんて可哀想だと思うもの」

裕美の豊満な胸に触れた純樹の手が自然に動き始めた。泥酔状態に近い若い男が、一度火が点いてしまった性欲を抑えることなど出来る訳がなかった。

突然、雄と化した純樹の貪るような愛撫を受けながら、静江には与えることの出来ない愛を与えている自分に満足しながら、裕美は、純樹から受ける官能の渦に巻き込まれていった。

二年近い月日が流れた。大学のキャンパスから見える賀茂川の面が、秋色に輝く様子を思い出しながら、達彦は宇治川の辺を歩んでいる。大阪に就職している彼は、この宇治川を歩くのは正月以来だった。達彦の横には裕美の姿があった。

「理由を教えて」

宇治には純樹の住むマンションがあった。純樹が卒業して京都の金融機関に就職して一年半が経過した。達彦が大阪の商社に就職して半年。今年の正月は、純樹のマンションにバレー部の仲間が何人か集まって新年会を開いた。

その席には裕美もいた。裕美は、純樹が四回生のクリスマスイヴに肉体的な関係を築いてからというもの、ほぼ彼の側に入浸りとなり、彼が就職して新しいマンションに移った後にも、半ば同棲のような状態で純樹と暮らしていた。純樹は、静江に手紙を書くことも止めると裕美に約束した。裕美にとっては王子様が現実のものとなったのであろう。

当然、達彦にとっては信頼している純樹の行為を必ずしも是認できるものではなかった。だが、純樹と二人で話をした時に、静江のことを一番愛していると、当然のように述べた純樹の瞳を見て、なぜだか安心できた。むしろ、今となっては性的な魅力以外に何も感じない裕美と、見かけ上は仲良くつき合っている先輩を頼もしくさえ感じた。

だから、裕美が純樹とつき合っていることを知ってからも、達彦は純樹との関係を昔ながらに保っていた。しかし、その裕美とも三ヶ月ほど前の暑い夏の日に別れたらしい。達彦はそのことを純樹の口から先月に聞いた。

先月、純樹から突然誘いを受けて梅田で飲んだ折に聞かされた。だが、純樹は裕美のことはほとんど気にしておらず、その夜はもっと大変な事実を達彦に打ち明けたのだった。

葬儀会館から出てきた達彦は、会館の中庭で深い呼吸をしてから悲しい気持ちを切替え、バレー部の友人たちにこの後の段取りを指示していた。

「お久しぶりね」

晩秋の穏やかな日和日に最も不似合いな、艶美な雰囲気の裕美が、相変わらずの愛らしい瞳で達彦に近づいてきた。秋の日差しがあまりにも柔らか過ぎて、もうとっくに忘れてしまったはずの、裕美と過ごした学生時代の甘い思い出が、悲しいくらいに懐かしく感じられた。

裕美は黒いワンピースの喪服に身を包んではいたが、本人の自制では抑え切れずに、自然と漏れている色香が、葬儀の雰囲気には不似合いであった。

「そう？半年ぶりくらいじゃないか？」

前に会ったのは正月だから、正確には十一ヶ月ぶりである。

「少し話したいの。時間を頂戴」

裕美がそう言って達彦をじっと見つめた。しかし、その瞳に本当の悲しさは映っていないように彼は感じた。

「少しなら……」

達彦は後輩に一言告げてから歩き始めた。葬儀会館から離れて、閑静な住宅街を抜け『あじろぎの道』を横切って『十三重の塔』が立つ中洲に渡る架け橋の真中で立ち止まった。川辺に迫る山々の木々はすっかり紅葉している。春には桜、秋には紅葉が彩りを添える美しい地域だ。

「理由を教えて」

裕美が、達彦に対しては相変わらずの強い態度で接してくる。彼は正直なところ、裕美には何も話したくなかった。達彦は大学を卒業後も純樹の一番の友であったから、彼の心根を知っていた。次々に男を変えていく彼女に、純樹の純粋な気持ちや苦しみを話したところで理解されないだろうし、小馬鹿にされて純樹が汚されるような

思いがあった。
「君が知る必要は無いと思うけど」
達彦はそう言って欄干に身を寄せて、広々とした川面の清らかな流れを目で追った。同じように欄干に並んだ裕美が、不可思議な表情で達彦を見上げる。その瞳には涙が浮かんでいた。
「本当に悲しいの？」
達彦が裕美を冷たく見下ろしながらつぶやいた。勝手に純樹を好きになって転がり込み、勝手に嫌いになって出て行った裕美を達彦は信用できない。
「当たり前でしょう。いくら別れたとは言え、つい三ヶ月前までは愛し合っていたのよ。結婚も考えていた仲だったんだから！」
純樹の葬儀は実家には戻さずに、彼が住まいの近隣の葬儀会館で行なった。実家は富山県なので、弔問者のことを考えるとこちらで行う方が合理的であった。
「どうして純樹さんが自殺したのか、私には知る義務があるわ。私にも責任があるのかも知れない。私だって辛いのよ」
昼一番の明るい陽射しが、宇治川の川面をきらきらと賑やかに照らしている。
「辛い？君の行動が本宮さんの自殺原因であろうと無かろうと、責任は感じろよ。辛い思いをしろよ。本宮さんが振り向かない間は、幼少の頃の出来事や、王子様や、幻想めいたことを口にして必死に愛をせがみながら、一度振り向いてもらうと、昔の言葉なんて忘れたように身を翻してしまう。そんな人間は、自分が招いた結果よりも自分がとった行動に責任を感じて、もっと苦しむべきだよ」
川面に冷やされた爽やかな秋風が、やや熱くなった達彦の胸をすり抜けていく。
「魅力を感じなくなった相手と別れて何が悪いのよ」
裕美は風に髪を洗いながら、やや怒気を含んだ声で反論した。達彦は甘い香りのする秋の空気を胸一杯に吸い込んでから、彼が裕美と別れつつある期間に考え抜いて出した結論を話し始めた。

「君はいつも自分の魅力を確認しているだけだ。自分が気に入った男と出会うと、何とか自分に振り向かせようとする。でも一旦思い通りになればそれで満足。つき合っていても本当は楽しくない。そこへ他の男が現れると、すぐにその男に自分の魅力を認めさせようとする。それは、より理想的な王子様を探しているようで、実は自分の価値を自分で認めたいだけだ。色恋以外に何の興味も特技も持たない君は、そうすることでしか自分の価値を自覚することが出来ない」

裕美はしばらく茫然として、優しい秋の陽射しを浴びていたが、やがて、怒りの波動が欄干を通じて達彦に伝わってきた。

「今頃二年前の愚痴を言っているわけ？純樹さんに魅力が無くなって他の素敵な男性に気移りしただけよ。純樹さんだってあなたと同じだった。結局は自分の性欲を満たす対象でしか女を見ていない。私にすれば、あなたも純樹さんも単なる雄でしかないわ」

達彦がついさっき感じた、学生時代の裕美との思い出の香りが、再び彼の胸中に広がった。裕美の言うとおり、確かにセックスに溺れた一面もあった。だが、実際のところはそれだけではない。温かい心を通わせて相手の思いやりに感謝しあったり、感動しあったりした思い出もたくさんある。そんな色々な思い出を、極端な一言で片付けられた達彦は、淡い思い出の結集である、アルバム写真を目の前で引き裂かれたような冷徹な震撼を覚えた。

「単なる雄か……。それは君が単なる雌だからだよ。男に対して、否、他人に対して求めることしか出来ない君に、性以外の何を求めるんだ？他人に与える人間愛が無い者は、動物としての欲を満たしてあげることしか出来ないだろう」

達彦は、裕美を非難することで、裕美との美しい思い出を守っている自分が可笑しかった。こんな言葉で彼女を傷つけたくもない。思えば、昔もこんな風であったような気がする。

「純樹さんやあなたが、私に人間らしい愛情をたくさん下さったわけね。私には、私の身体を貪るだけの卑しい動物にしか映らなかっ

たけど……」
裕美は皮肉な笑みを浮かべて鋭い視線で達也を射た。
昔もずっとこんな風だった。達彦が勝気な裕美に対して、ついむきになって相手を傷つける言葉を吐くと、それに輪を掛けて冷たい言葉を浴びせてくるのが常だった。
「もう止そうよ、傷つけ合うのは」
彼女は無言で達彦をにらんでいる。達彦はゆっくりと歩き始めた。橋を渡り、中洲に渡り、係留してある観光用の浮舟が見える川辺で足を止めてから、灰色の石材でできたベンチに腰を降ろした。
「俺も最初からちゃんと話せば良かった。どうしても君の行動が許せなくてつい……。俺がとやかく言う立場じゃないのに。申し訳ない」
裕美はしばらく突っ立ったままで青い空を見上げていたが、やがて柔和な笑顔を浮かべて彼の横に並んで座った。
「きちんと話すから、君も最後まで冷静に聞いてくれ」
裕美は、達彦の記憶に残っている最も美しい笑顔に近い表情を浮かべて静かに頷いた。
「君は本宮さんと愛し合っていたと言ったけど、大きな誤解をしている。本宮さんは君のことを愛してはいなかった。いや、愛せなかった。あの人が愛していたのは、やはり静江さんだけだ。君の言うとおり、本宮さんだって若い男だから、君の美しい肢体を見て、雄の欲求に支配されたことも確かだ。本人が認めていた。でも、それだけで、君に対して本当の愛情を注ぐことは出来なかった」
達彦は対岸の風景を見つめたままで、裕美が立腹しないことを祈りながら語った。
「まだ、ずっと静江さんを愛していたと言うの？じゃあ何、ずっと静江さんに手紙を書き続けていたとでも言うの？純樹さんは、大学を卒業するときに書いた手紙を最後にすると私に言ったのよ」
川面に浮いていた水鳥たちが、一斉に飛び立って、弧を描きながら飛び去っていった。

「ああ。ずっと書いていたよ、君とつき合っている間も……。君に嘘をついたことも聞いていた。だが、そうしないと君に申し訳ないと言っていた。君が何かと自分に尽してくれるのに、いつまでも静江のさんの影を見せるのは申し訳ないと言っていた」
「馬鹿にしてるわ」
裕美は水鳥の飛び立つ姿を目で追いながらそうつぶやいたが、語気に怒りは感じられない。彼女も冷静を保つ努力をしているようだ。
「本宮さんも悩んでいたんだ……」
達彦は足元の小石を軽く蹴ってみたが、川には落ちない。
「何を？」
「一度は君のことを愛そうとしたけど、どうしても愛せないこと。否、他人を愛せないことに苦しんでいた。自分の心に築いてしまった静江さんの虚像に心を支配されたまま、現実のどんな女も愛せないことを不思議に思っていた。愛している積りが、性欲に支配された自分勝手な愛情だという事実を何度も自覚していた。女に対する愛情て、いったい何なのか解らなくなったと言って苦しんでいた」
達彦はそう言うと、ふと先ほどの葬儀の情景が浮かんできた。
焼香の際、大柄の達彦はやはり目立った。純樹の家族と何度か面識のある彼は、遺族の方々に深々と頭を下げて哀悼の意を表した。彼は遺族の表情を長く見ていることは出来なかった。焼香を済ませた達彦は、悲哀の空気から逃れるように会館を出てしまった。こんな別れの場面が、世間のあちらこちらで、まさに日常茶飯事の如く行われていると思うと、人生の冷酷さに恐怖すら覚えた。
「純樹さんは他人を愛せないんじゃなくて、自分を愛せなかったのよ。いつまで経っても自分を許せなかった。静江さんを裏切った自分が許せなかった。そしてそんな自分を愛せるわけがなかった」
裕美が、二人の生活を思い起こすような口調で静かに語った。
「自分を信用できなかったのだと思う……。この世で一番信用できないのは自分だったのかも……」
達彦は、今思い浮かんだ言葉を口にして、案外、これが自殺した真

因なのかも知れないと思った。
「辛いわね、そんな人生」
裕美の心は、まだ、過ぎ去った生活の中にいるようだ。観光客の団体が橋の上から両岸の風景を写真に収めている。
「でも、純樹さんは以前からずっとそうだったじゃない。ずっと自分を許せなくて苦しんでいた。それが何で今なの？何かきっかけがあったんじゃないの？」
ようやく現在に戻ってきた裕美が、切れのある語り口調に戻った。
「あったよ。でも君とは関係ないから安心して良い。君が他の男を好きになるのも、自分が嫌われるのも、本宮さんは当然だと思っていた。だから君の行動には全く影響されていない」
達彦は、裕美の心が少しでも軽くなるように説明した積りだった。
「そう。じゃあ良かった。私に嫌われて、絶望して自殺したのでなければいいわ」
なぜか裕美は、突然怒気を露にして、暖かな日和の空気を冷たく引き裂いた。もし自分が原因だとすると、責任を感じて辛いと言い、原因でないと知ると、自分の存在の軽さに憤る。恐らくそんなところだろうと、彼は裕美の我侭を想像してみた。
「ごめんなさい。取り消します……」
裕美は小さく溜息をついてから立上った。そして数歩歩んで堤の端で立止まって深呼吸をした。そして達彦を振り返った素顔は、久しぶりに素直で明るい表情だった。達彦は、過去に静めた裕美への思いがどきりと疼いたようで、息を詰まらせた彼女に見惚れた。
　達彦は内ポケットから封筒を取り出してから一葉の手紙を抜き出して広げた。再び達彦に近寄ってきた裕美は、
「何、それ……」
と言って手紙を覗きながら彼の横に座った。
「返事。静江さんが本宮さんに送った、最初で最後の返事。先月本宮さんと話した時に見せてもらった。そして先週、純樹さんが俺宛に郵送してきた」

達彦から手渡された手紙に裕美は目を通した。
『長い間お手紙をくれてありがとう。私は純樹さんのことを愛しています。でも、いくら考えても、どんなに勇気を奮い立たせても、あなたと一緒に人生を歩むことは出来ません。あなたは私のことを忘れて、新たな人生を歩むべきです。自然にあなたが離れていくことを願って、返事を書かないでいた手紙なのに、心のどこかで楽しみにしていました。手紙が来なくなることを願いながら、来なくなる日が恐かった。あなたのお手紙のおかげで、私は純樹さんと一緒に高校を卒業し、大学生活を楽しんできたような気がします。そして今は一生懸命に仕事をしている気分。でも、本当にもう終わりにしてください。もう手紙は書かないで下さい。私のことは忘れて下さい。たった一通ですが、最後にお礼の返事をお送りします。長い間本当にありがとう。そしてさようなら……』
何度も読み返す裕美の瞳から涙が溢れてきた。
「どうしても一緒になれなかったのかしら……」
涙で声を詰まらせながら、裕美がひとり言のように言葉を漏らした。
「未だに精神科に通っている静江さんが、本宮さんと一緒にいられると思うか？いろいろな意味で刺激が強すぎる」
達彦はそう言ってハンカチを差し出した。
「静江さんも辛かったでしょうね、純樹さんのことを思って別れを告げるのは……」
裕美はハンカチで涙を拭いながら言葉を続ける。
「この返事を読んだ純樹さんは、静江さんとの愛を失って絶望したのね。純樹さんにとっては唯一愛することのできる女性だったのだから、大変なショックだったでしょうね」
そう言った彼女は大きく息を吸ってから、
「でも皮肉なものね。静江さんが、純樹さんの人生を考えた上で、身を切るような辛い思いで出した結論なのに、純樹さんが絶望して命を絶ってしまうなんて……」
と、どうにもやり場のない憂鬱な心根を吐露した。

「本宮さんは絶望なんかしていなかったよ」
達彦は微笑を浮かべて、悲しみに苛まれている裕美を癒そうとした。
「え？」
達彦が何を言っているのか全く理解できない裕美は、子供のように幼い瞳で彼を見つめた。
「本宮さんはこの手紙を俺に見せた時には笑っていた」
彼は子供に接するような優しい瞳で裕美を見つめる。
「どういうこと？」
彼女の瞳は性急に説明を求めている。
「だって、静江さんが今までの手紙を読んでくれていたんだよ。そして、静江さんは今も本宮さんのことを愛している。ずっと離れていたけど、一方通行の手紙だったけど、愛は通じていた。二人は愛し合っていたということが明確になった」
達彦の笑みが更に大きくなって彼女の悲しみを包み込んだ。
「でも別れを告げられたのよ？」
裕美は疑心暗鬼な表情で達彦の言葉を覗き込む。
「これは別れの手紙じゃない。どう見てもラブレターだ。本宮さんのために静江さんが我慢することを告げたラブレターだ。本宮さんは全く気にしていなかった。手紙を止める気もなかったよ。逆に嫌われるまで書き続けると言っていた。だって、どうせ一緒にいられないのなら、静江さんに嫌われた方が、彼女の心の負担が少なくて済む……。本宮さんはそう言っていた」
微笑で包んだはずの裕美の瞳から再び涙が零れ落ちてきた。
「じゃあ、じゃあどうして純樹さんは……」
次の言葉を口に出だそうとしたとき、達彦も急に涙が溢れてきそうになった。だが、その涙を飲み込むようにして、大きく深呼吸をしてから、
「静江さんは、本宮さんと別れようとしていたんじゃなかった。静江さんは、静江さん自身と別れようとしていたんだ」
と、静かな語り口調で話したが、とうとう最後は涙声になってしま

った。
「まさか……」
裕美の身体が硬直する。
「この手紙が届いた数日後に静江さんが自殺した……」
達彦は努力したにも関わらず、涙が滝のように流れ出した。その涙を裕美に見られまいと、彼は立上って、抜けるように青い空を見つめた。裕美は、達彦の言葉が届く前に両手で耳を塞いだが、俯いた彼女の身体は嗚咽で震えていた。
　達彦はゆっくりと川辺に近づいて秋色の風景に目を馳せた。遠い山肌の所々で自然の樹木が紅い息をしている。
「やっぱり生き続けるべきだったよ、本宮さん……。あなたまでいなくなったら、静江さんは本当に消えてしまうじゃないですか。あなたは生涯、静江さんを愛し続けるべきだったよ」
青空に向かって小さく呟いた達彦の前を、真赤に色づいた一葉の紅葉の葉が、激しい川の流れに翻弄されながらも、懸命に浮揚しながら流れ去っていった。

流れ去るとき（後書き）

最後まで読んで頂いてありがとうございました。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5581z/

蒼いときの流れる頃

2012年1月14日13時46分発行